

I begin to walk.

なしち

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジョニイ・ジョースターが漆黒の殺意を抱きながら人理修復を目指す話。

# 目次

炎上汚染都市冬木

運命に出会う

廃教会にて

洞窟へ

怨敵邂逅

二人目

準備万端

草原で語る

アーチャーだから弓持つてゐる

街を歩く

聖人問答

129 112 97 83 66 52 44 30 8 1



# 炎上汚染都市冬木

## 運命に出会いう

「あ、あ……？」

よく、わからなかつた。

自分は確かに人理保障機関カルデアにレイシフト適正があるとか言われて、大変なお金が手に入りそうだつたので、飛び付いて参加したのだ。親はろくに家にいなくて、金もあまり寄越さない。そのわりにふらつとやつて来たと思つたら兄弟ばかりが増えていく。この前実に八番目の赤ん坊ジョナサンが追加されて、家も家計も限界だつた。

成人しているのは自分と長兄の定助だけで、定助は最近彼女との結婚も悩み始めていた。とてもじやないが今はそんなことを考えられる家庭状況ではないのだけれど、それでも康穂が好きなのだ、と苦しそうな顔でいついていたのを覚えている。三番目のジョリーンはよく家でのことを支えてくれていて、実質の母親代わりは彼女であろう。定助、ジョニー、ジョリーンが現在社会人として働いていて、四番目のジョルノが学生ながらバイトをして、それでなんとか一家全体がまわっていたところだつた。

そこに赤ん坊の追加である。面倒を見るのはいい加減手慣れてきたにしても、まだ幼稚園のジョセフや小学生の承太郎もいる。仗助だつて中学生になつたばかりだ。そろそろお下がりですませるにも限度がある。

お金が、足りなかつた。

そこに大金とともに飛び込んできたのがマスターとしての仕事である。住み込みで下手したら年単位で帰宅が難しい可能性はあつたが、これだけ金が手にはいるなら、家に家政婦をお願いすることも、なんなら定助の結婚資金の足しにしてやることもできるだろう。

そうして兄弟たちにギヤン泣きされはしたものの、カルデアにやつてきたジョニイ・ジョースターは本日初のレイシフトを体験するはずだつた。

はず、だつたのだ。

轟音と共に入つたカプセルがしつちやかめつちやかに揺れた辺りまでは覚えている。その後がわからない。

呻きながら体を震わせる。

寒い。熱い。耳。音が聞こえる。ぱちぱちと何かがはぜているような音。目。ゆつくり押し開けると、ひどく視界がぼやけていた。

何度も瞬きをして、多少はつきりはしたもの、遠くまではわからない。赤い光がゆ

らゆらとあちらこちらで揺らめいていて、テレビとかの災害現場で見るような破片がたくさんたくさん積み上がっているのはわかつた。どうやら瓦礫の中にもたれて座り込んでいるような状態なのだとあたりをつける。寒い。とても寒い。温かいところに行きたかつた。そうだ、腕、足は？手に力をいれる。指が手のひらをひっかく感触があつた。右手を動かし、左手を動かす。大丈夫。

足。足は？

全く下半身がそこにあるとは思えない感覚に、嫌な予感がした。首を動かして目線を下半身にやろうとする。もたれていた瓦礫が崩れ、がくんと頭が落ちた。胸にしたたかに顎を打ち付ける。明らかにそれだけでない痛みが全身を駆け抜けて、思わずうめいた。

咄嗟に閉じてしまつた目をゆつくりあける。うつむいた形になつた視線の先に、腹の辺りに瓦礫が突き刺さつてゐる光景がある。足は？瓦礫の向こう側になんとか爪先が見えた。

「あ、ああ、あ、あ……」

声をだすたびに瓦礫が腹の中で存在を主張しているようだつた。たぶん、突き刺さつてゐる。内蔵をえぐつて、背骨を碎き、地面まで。

死。

「あ、あああ」

救助があれば生き抜けるのか、それすらもわからない。霞んだ視界でもわかる、どう見ても重症だ。意識が戻つたのも奇跡かもしれない。動こうとして、失敗する。かろうじて持ち上がつた手が腹の辺りに乗つかつた。れいじゅとかいう妙なマークが手の甲に入れられていたはずだが、血まみれで見えなかつた。

寒い。熱い。痛いのかどうかもわからない。さつきより前が見えない気がする。

死。

嫌だ。

家族の顔が脳裏にうつる。親は間違いなくろくでなしだつたが、兄弟はそんなことはなかつた。一癖も二癖もあるやつらで、毎日誰かしらがなにかの問題をおこしてはこつそり解決していくけれど、それでも。

好きだつた。大事だつた。

なのに、死ぬのか。

思い出が脳内を過りはじめて、咆哮した。

咆哮に引きつれた腹筋が瓦礫を包み込んで痛みを伝えてくる。 そうだ、 痛み。

走馬灯を痛みでねじ伏せて、瓦礫に今度こそ手をのせた。

腹から引き抜こうとして、手が滑る。

揺れた瓦礫がさらに痛みを伝えてくる。

大丈夫、まだ生きてる。震える手が瓦礫をつかむ。もう一度動かそうとして、また手が滑る。痛い。

あ  
あ  
：

生きたい。生きたい。死にたくない。死んだら家族は。生きたい。生きたい。  
手がぶるぶる震えている。何度も瓦礫をつかんで滑ることを繰り返し、やがて、と  
とう掴むことすら出来ずに手を添えるだけになつた。瓦礫から手を離さなかつたの

は意地だつた。

「あ、あ、あ、あ、あ、……」

呻く。顔が血と涙と鼻汁と涎と喀血でぐちゃぐちゃだつたことすらわからなかつた。  
死んでたまるか。死んでたまるか。生きたい、生きたい……！  
もう一度、

「あ会、い、あた、いい、……！」

泣かせてまでカルデアにきて、この様だ。せめて、もう一度、家族の顔が見たかつた。  
視界の端で、何かが強烈な光を放つ。

いつの間にか閉じかけていた瞼をこじ開けて、頭を無理やり持ち上げた。ぐらぐら揺  
れる頭はごつんと背後の瓦礫に当たつて止まる。今度は崩れなかつた。

瓦礫に隠れてわずかに見える爪先の先、誰かがたつている。

「あ……」

頭がある辺りが白かつた。後は、たぶん黒づくめ。ぼやけた視界はもはやそれしかう  
つきない。

「サーヴァント、アサシン。シャルル＝アンリ・サンソン。召喚に応じ参上した。あなたが僕のマスターか？」

なのに、不思議とその声ははつきり聞こえたのだ。

# 廃教会にて

召喚の口上を述べながら目を開ける。呆然とした。目の前には瓦礫と血にまみれた男が座り込んでいた。かろうじて瓦礫に引っ掛けつて座位を保つてはいたが、今にも崩れ落ちてしまいそうだった。

ラインはその男に。白かつたのであろう制服は真っ赤に染まり、腹につきたつた瓦礫は血の手形にまみれていた。

「マスター!!」

叫んで駆け寄る。虚ろな目がゆっくり閉じた。息は。脈をとる。辛うじて生きている。体の回りに広がる血あまりが出血の量を示している。

失血がひどい。腹の他に怪我は。瓦礫をどうにかしようとしたのか、手のひらがはずたずただつた。

頭が血まみれだったので、帽子を剥ぎ取つて頭部の怪我を探るも見当たらない。返り血？誰の？見渡すも他に人の気配はなかつた。喀血が塗り広げられたにしてはおかしいが、怪我がないのなら後回しだ。

胸まわり、奇跡的に異常なし。足。折れているが出血はない。内出血の兆しは見える

が、腹よりはましだ。

やはり、腹。

スキルの医術A+を行使しつつ瓦礫を抜き取る。出血はとまつた、止ませた。多少の骨折もなおつてはいる。だが、それだけだ。顔は青白く、未だに予断を許さない。

でも、生は繋いだ。

マスターをそつと抱き上げる。ふらふらと揺れる足を見る。医術は医術にすぎない。魔術ではない。

つきたつた瓦礫の位置が悪すぎた。マスターはもはや、一生歩けぬ定めにあるかもしない。だが、あるいは。自分より腕のいい医者や、魔術師に出会えれば、といったところか。

なんにせよ、この悪辣な環境にマスターを置いてはいけない。安全な場所を探さなければ。

サンソンはマスターを抱いたまま、ゆっくりと歩み始めた。



喋り声が聞こえる。たぶん、女の声。  
ゆっくりと目を開く。

「…………マスター？」

聞きなれない声がした。

ひどく寒い。霞んだ視界は、何度か瞬きをするとはつきりと辺りをうつしだした。心  
なしか似たようなことをしたような覚えがある。その時よりかははつきりと辺りが見  
えている気がする。

「所長！ マスターが目を覚ました!!」

「本当に!?」

視界に顔が2つ飛び込んでくる。一人は所長。説明会で見た。一人は、カルデアに元  
からいた女の子、だつたと思う。目が覚めたのね、よかつた、現状唯一のマスターまで  
死んでしまつたら云々。かしましい喋り声に思わずうめき声をあげる。

「お二人とも、失礼します」

その二人をそつと退けて、白髪の男が自分を見下ろしてくる。

恭しく手が持ち上げられて、脈をとられる。

「無事に目が覚めて何よりです、マスター」

「マスター……？」

「ええ、はい。僕はシャルル＝アンリ・サンソン。あなたのサーヴアントです」  
 さんそん。サーヴアント。サーヴアントはわかる。カルデアにきてから小難しく説明されたので、大昔の英雄を使い魔として召喚したものとして噛み砕いて認識した覚えがある。自分が召喚することになるとは思わなかつた。

そういえば、気絶する前に見た人影とも特徴が一致する。死ぬ前に召喚したのか。

「おまえが、ぼくの、」

「はい、アサシンのサーヴアントです。……失礼ですが、僕のことはご存じですか？」

サンソンは話をすることをやめずにしてきぱきと現状を確認していく。生憎と名前から思ひ浮かぶものはなかつた。でも、落ち着いた声だつた。安心する。迷いのない手つきもまた、安心して体を委ねられるものだつた。

ちらりと腹の方に目をやる。当然のように瓦礫はなかつた。

「…………医者、？」

「…………ええ、はい、医者もしていました」

「処刑執行人よ、それ」

横たわつたまま動けない視界にまた所長が入つてくる。

「フランスの処刑人。ルイ十六世とかマリー・アントワネットとか処刑してゐるわね、ギロ

チンの使用じや世界一なんじやないかしら」

眉を潜めるサンソンの顔が見えた。

「そんなことより、ジョースター、あなた、意識ははつきりしてゐる？ここがどこだかわかる？」

「冬木の異常つて燃えてることだつたつけ？」

「結構。私のことは？」

「カルデアの所長」

「ますます結構。早速だけど現状の通達よ。今現在レイシフトを確認できているのはこの場にいる三人のみ。私、マシユ、そしてジョースター。カルデアとはたまに通信が繋がる程度よ。現状マスターはあなただけ、そして召喚されたサーヴァントがサンソンと、現在デミサーヴァント化しているマシユ。以上」

この上なく簡潔であつさりした説明だつたが、漸く回りだした脳みそにはすとんと落ち着く説明だつた。

「カルデアとしてはこの特異点の調査を続行する方向でいます。あなたはかなりの重傷だから、仮拠点としたここで寝ていてもらつて、サンソンだけ貸してくれればいいわ。結界ははつていくし、大人しくしてゐること。定期的に戻つてくるから、せめて意識を保つことね」

「……」

「な、なによその目は」

「……所長、怪我人を一人置いていくのはどうかと」

マシユの言葉に、体の様子を見終わつたサンソンが頷いた。

「僕としてもマスターと離れたくはありません。貴女は僕のマスターではない。従う理由もありません」

「あなたのサーヴァントどうにかしなさいよジョースター!! ただでさえこんな状況なのに使えるサーヴァントがアサシン一人とデミサーヴァント一人なのよ!!」

「いや、ぼくも一人にされるのとか嫌だけど。ていうか、さつきからぼくの体のことは説明してくれないよね?」

……どうなつてんの?」

一様に、三者が黙つた。

なんとなく、わかっている。ひたすら寒くて、たぶん血液が足りない。でも痛みは無くて、腕とか胸とかの感覚はさつきサンソンが様子を見てくれた時にあるのを確認した。腹はあまりみたくないが、布のようなもので覆われているのも見えた。脳みそはたぶんちゃんと回つてゐるし、ろれつもちゃんとしている。

ただ。

「……脊髄が砕けてる」

目をそらして、所長がいつた。

「あなたのサーヴァント、医術のスキルがあつたのね？私たちと合流するまでに治療してもらえていなかつたら死んでいたでしょ。合流してから私も治療魔術を施したけれど、正直こんなところじやこれ以上の治療は無理だわ。

……たぶん、カルデアに帰るまで、あなたは腰から下が麻痺したままで。そもそも出血しない程度にしか傷口が塞げてない。出来ればこの場から動かしたくないわね」

「……カルデアに帰るまで？」

「カルデアに帰つたら医療設備もあるし、魔術ももうちょっとましなものをかけられる。爆破されたからどこまで残つてるかわからないけれど、少なくともこんなところよりは断然ましだと祈りたいところね。

……どこまで治せるかはわからないけど、通信の報告と、この現状を見る限りじやカルデアで活動出来るマスターはあなたしかいないもの、ええ、手を尽くします」

こんな状況で、下半身が動かなくて。今後も治るかななんてわからなくて、トップの所長は自分を置いていくという。戻つてくるかもわからないし、頼りのサンソンまで連れていくと。正直、サンソンが残るといつてくれなければ、みつともなく泣きわめいて

発狂していたかもしれない。でも、そうはならず、所長の真意を聞けた。

「……最初からそういうべきだったかと」

「怪我人に対する端的過ぎます、所長」

「うるさいわね!!」

寒い。ひどく寒い。万全ではない。でもその寒さが冷静さを呼ぶ。もしかしたら本当は冷静の欠片もないのかもしれないが。

「あーーー…………とりあえず、所長、」

「なによ!!」

「サンソントンとマシユの出来ることを把握したい。サーヴアントって特殊なことが出来るんだろ? 後、何をもつて調査を終了するのか、いつカルデアに戻れるかも聞きたいし、ぼくの体をこんな風にしたやつに心当たりがあるのかとかも」

「えつ、ああ?」

「ぼくに情報をくれ。……後、寒い」

えつ、という顔で三人が固まつた。

「はあ!? ちよつ、ちよつと喋り続けなさいよ!! 寝るんじゃないわよ!! マシユ! 補給物質に毛布なかつたかしら!?」

「ええと、もうマスターに使いきつてしまつてます……。廃教会の中も使えそうな備品

はありませんでしたし……」

「……仕方ありません、礼拝堂の装飾の布を剥ぎ取ってきます。非常時ですから神もお許しになるでしょう。マスター、それまではこれを。本来は僕も靈体化していた方がマスターの負担にならないのでしようけれど」

「維持できてるなら現界させなさい!!!!!!人手を減らすわけにはいかないわ」

「……正直よくわかんないけど、ぼくもいてくれた方が嬉しい」

「わかりました」

着ていた黒いコートを僕に被せ、サンソンが視界から消えた。

「…………所長」

「…………なに」

「戦力つていったよな?……敵対行動に出てくるものがいるのか?」

「…………」

黙りこんでしまった所長の横で、マシユが頷いた。

「現在竜骨兵等の骸骨型エヌミーを確認しています。それから遠目にですが、黒いもやに覆われたサーヴァントらしき姿も」

「骸骨つて……なんだ、ホラー映画かなにかか?一人でいるときに襲われなかつたのは運が良かつたな」

「そうですね」

頷いたマシユの姿を改めてみる。

パークーとワンピース姿だったのをカルデアで見かけていたが、それとはうつてかわつての鎧姿だ。デミサーヴァント。人間と英靈の融合。魔法少女かなにかだろうか、とぼんやり思った。

ふと、気になつて疑問を口にする。

「あんたもぼくをマスターと呼ぶのか？」

「……？ええ、現状唯一のマスターはあなたです。所長にはマスター適正がありませんから。意識がありませんでしたので契約はしていませんが、この状況ですから、本来は契約してしかるべきかと」

「その方がいいでしょうね。デミとはいマスターはいなくてはならない。ただ、貴方がその負担に耐えられるかつてどころだけど。もう一度確認するけど、現状どうなの？」

「……よくわからない。寒いんだ、すごく。寒いだけでもあるけど。痛みはない」

「…………」

黙つて二人が顔を見合させた。

「……やめておきましょう、カルデアにかえつて、容体が落ち着いたら契約にしましう、ね？」

「私もその方がいいと思います……。宝具を使わない通常戦闘であれば現在支障はありません。元々宝具は使えませんし」

「そう、 そうなの……それなら……え？」

「ああ、うん。やつぱり、マジやつべーー、ってことだろう。沈黙の意味を察せないほどは朦朧としていない」

ぼんやりと目を開いた状態を保つ。横に寝かせられている以上、見えるのは頭上の木の枝だけだった。視線を動かせば近くに誰がいるかはわかる程度の視界の狭さ。

人に目線を合わせるのが疲れて、大人しく上を見上げる。焦げた枝がまばらに夜空を遮っている。薄暗いが、ほのかに赤く辺りが照らされていて、全く周囲が見えないというわけでもなかつた。さつきの言葉からするに、近くに廃教会があるが、拠点にするにはあまりにもボロボロだったので、せめて建物の近くの木陰に身を寄せた、といったところだろうか。

「待ちなさい、待つてよ、マシユ？あなた宝具が使えないの？」

所長の声が今までより悲痛に聞こえて、視線をそちらに戻す。顔が真っ青で、向き合うマシユの顔色もよくはない。

「…………すいません、私、私に力を託してくれた英霊の真名すらわからないんです。宝具も全然……」

「ああ…………うん、 そうね。 そう言つてたものね、 そう、 ……どうしましよう」

「それってヤバいの？」

「あなたね……」

「はあー、 と深くため息をついた所長が近くによつてくる。

「サーヴァントについての説明で一緒に学ばせたはずでしよう？ そもそもね、 私あなたの上司よ？ 上司。 しょ・ちょ・う!! 敬語くらいどうにかしなさいよ」

「えー…………今よくわかんないし……喋りづらい…………」

「んんっ…………それなら…………いえ結構しつかり喋つてるわよね、 敬語くらいできるわよね！」

「それより宝具、 使えないと何がヤバいの？」

「切り札がない、 ということになりますね」

答えは離れたところから聞こえてきた。 サンソンが戻ってきたのだ、 と、 そちらに目線を向ける。 腕に一杯の布を抱えているのが見えた。 視界の端で所長が頭をかきむしっているが、 まあ、 いいか。

「本当は火がおこせればいいのですが、 さすがにこの場では……。 ある程度の汚れは落

としてきました

埃っぽくて所々焦げていたが、装飾用とあつてそれなりに厚い布だった。赤ん坊のようぐるぐる巻きにされる。コートを返そうとしたが、断られた。

「着ていて下さい、僕の宝具はそれではありませんから、あなたに着せていても問題はありません」

「……ありがとうございます」

大人しくコートごとぐるぐる巻きにされて元の位置に戻された。

では、解説しましよう、とサンソンが隣に座った。

「さて、宝具、ですが。簡単に言うのであれば、生前の伝承が具現化したものと思つてください。剣であるときもあれば、彼女の様に盾である場合もある。僕のように逸話が具現化したものであること。早い話が必殺技ですね」

「つまり、こっちのHPゲージがぎりつぎりで、相手のHPゲージが満タンでも、宝具さえ使えば相手を倒せることもあるつてこと?」

「……えーっと、ゲームとかの例えですか?はい、知識のダウンロードが間違つていなければ、その通りの認識であつています。その英靈の特性を最も示すものであり、効果は様々ですが、あるとないとでは大きく違うでしょう。真価を發揮するには真名解放を伴うものが多いので、宝具を使用するとそれなりに魔力を消費するとか、サーヴァントの

名前がわかつてしまう可能性があるとかの難点もありますが」

「なるほど……」

そこまで言つて、サンソンはちらりとどこかに目線をやつた。その先に、たぶん、盾とやらがあるのでだろう。

「先程も言いましたが、彼女の宝具はおそらくその盾でしょうね。真名解放を伴うものではないかと」

盾の真名解放つて、盾の特性を解放することは、単純に考えるなら、ものすごく強い防御が手に入ることになる。……今、めちゃくちや欲しい。

視界をさ迷わせる。どうもギリギリ見えない位置にいるらしい。気づいたサンソンがマシユを招き寄せてくれた。視界にマシユが入る。

「契約、しよう」

「!?でも、マスター、そのお体では、」

「もしかしたら契約していいせいでの宝具が使えないのかもしれないし、やつてみた方がいい。

瓦礫がたくさんで、炎が燃えてて、そして、夜なのに真っ暗だ。つまり、町が滅びてるんだろう？ それで、敵もいる。まだ町を滅ぼしたやつがいるかもしれないところで調査するつていつてるんだ、切り札は一つでも多くほしい。君のためにも。

「……どうせぼくは横たわってるくらいしかできないんだ、マジやつべー状態なんだろ？ それならこれ以上マジやつべー状態になつても変わんないだろ。死ななきやいいんだ」「…………わかりました」

「所長!?」

「ただし!!」

視界に所長も入つてくる。

「死なないこと。そして意識も飛ばさないこと。意識がなくて死にかけでもサーヴァントを維持できてはいたのだから、追加の魔力負担もなんとかなるでしよう。……なんとかしなさい。言つておくけれど、私個人は反対よ。所長としてはやらせるわ」

「……うん」

「でつでも、マスターは、マスターはこんな状態なんですよ!? だつて、さつきから、首すら動かせてないじやないですか!! 私なら大丈夫です、マスターと契約しなくとも戦えます、宝具だつて使つてみせます!!」

「でも、使えないんだろ？ 万が一の時に切り札がなかつたら、あんたも危ない。だつて戦つてくれるるのはあんただ」

マシユが言葉につまつた、という顔をした。思いつきりくしゃくしゃな顔をしてうつむく。たぶん、ぼくにすがりつこうとして、思い止まるような仕草さえ見せた。長い

沈黙のすえ、でも、と吐き出すようにいう。

「でも、…………ええ、でも。契約したところで使えないかもしません。契約しなくても使えるかもしません。一緒にです。」

「…………お願いです、マスター。私、怖いです。戦うのも怖いですけれど、そうして私のことを心配してくれるマスターを死なせることの方がもつと怖いです。だつて今にも死にそうなのに……私にとどめを刺させないで下さい…………！」

悲痛な声を絞り出して、マシユは顔を覆った。

「…………そんなヤバい？」

「…………戦わせなければいけない立場としてはくくりつけてでも連れていつて戦わせなきやいけないわ。」

でも、それを躊躇つて置いていきたくなるし、二人目の契約も躊躇うくらいには、ね。あなたを死なせるわけにはいかない。だからこそマシユと契約して戦力の底上げをして、とつとどこの状況を解決するか、それとも現状維持を徹底して解決するかつてことなんだけど。…………サンソンの宝具はどうなの？」

それを受けたサンソンが悩んだ顔をした。

「…………それなりにコストはかかりますが、悪人、罪を行うものであれば確實に処刑が可能な宝具です。が、今の供給量を見るに、一回が限度でしょう。それ以上は今の小康状

態が崩れます」

事実上、二人目を迎えるのは難しいと口にした。言いながら眉をひそめたサンソンの表情が気にかかる。その奥に、私は嫌です、と首をふるマシユが見える。所長も首をふりたそうな顔をしていた。

ヤバいのはわかつていて、そうか、そんなにやばいのか。痛みがないせいで現実感がない。寒くなければヤバイことすらわからないところだった。マシユの言うとおり、感覚はあれど上半身は動かず、下半身は言わずもがな。口だけどうにか回しているような状態だ。

「あー、うん……わかつた、契約はカルデアに帰つてからにしよう。しなくとも守つてくれるし、宝具も使えるようになつてくれるんだろう？たのもしいじやん」

「あなたねえ……、  
「…っ、はいっ！」

所長がため息をつく。

対照的にマシユは嬉しそうに頷いた。

「そんでサンソンの宝具は一回か……他なんかないのかな……ねえ所長、この調査の目的はなに？」

もう一度、所長が盛大にため息をついた。

「……特異点の正常化よ」

「……ええー……」

「たぶんしなきや帰れないわよ、通信も不安定でろくに情報交換できていないのに、レイシフトでの帰還なんか出来るわけないじやない！そもそもレイシフトの機械も直ってないでしょーし！」

「修理を待つまでに、異変の元がどこだかわかればいいんだけど、つ!?」

どん、と。唐突な爆破音。大きい。地面が揺れた。咄嗟にサンソンがぼくに覆い被さつてくる。マシユが所長を引き寄せた。

「なに、なに、なんなの!?」

「あちらです!! あれは……炎の巨人!?」

顔だけあげて状況を確認したサンソンの横顔が真っ赤に染まっている。炎の照り返しか。

「サンソン、ぼくにも見せて」

「…はい」

固定された腰を支えながら、ゆっくり抱きおこしてそちらに顔を向けてくれる。

「……なんだあれ、巨人が燃えてる？それが……なにかに攻撃してるのか？」

真っ赤に燃えた巨人が突つ立っていた。炎の中に透けるシルエットが藁人形のようにもみえる。そんなシルエットが動いている。豪快に腕をふるうたびに地面が揺れる。何かを執拗に叩き潰すように腕を動かす。一瞬にかが輝いて、——白い羽の、馬？それすらも巨人の腰の辺りまで飛び上がったところで何かの攻撃を受けて止まり、叩き落とされた。また爆破音。いや、破碎音？

「宝具か？」

「おそらくは」

「白い羽の生えた馬がいたけどそれも落とされたよな？あれも？」

「ええ。宝具でしょう」

「……つてことは、サーヴァントが少なくともあそこに二騎はいる。仲間割れしてるとことは、」

「…………どちらか味方になつてくれるかもしれない？」

それを聞いて破碎音のたびに悲鳴をあげていた所長が止まつた。涙目の眦を釣り上げて、唇を引き結んで、立ち上がる。

「決着がつく前にあそこに行くわ！両方とも敵になるかもしれないけど!!情報が欲しい！」

言い切つた所長の体はみつともないくらいに震えていた。それでも言い切つた。応

えたマシユも力強く頷いた。

「了解です!!」

「ジョースター、今すぐ結界をはつてあなたを隠すから、」

「いや、ぼくも連れてつてくれ!」

マシユとの契約は譲ったが、それだけは譲れない。

「敵がいるんだろ!?おいていかれた方が死ぬに決まってる!!最悪そつちが決戦中にぼくが殺されてサーヴァントが消えるぞ!」

「～～～～つ、「

所長が絶句すると同時にサンソンがぼくを抱えあげた。盾を掴んだマシユが駆け寄つてくるのも見える。

「腰部の固定を強化します、マスター、失礼を」

「私が担ぎますか!?」

「いや、僕がかついでいく。君は前に出て警戒を。その絶句してゐる所長さんは真ん中で、しんがりは僕だ」

「～～～～つ!!ああもうわかつた、わかつたわよ!!勝手に動かないでほしいのに!つれでくわ、私が担ぎます!サーヴァントは手をあけて、警戒を怠らないで!」

二人が頷いて、傷の固定が終わつたぼくを所長に背負わせた。なにか言ひたそだつ

たが、首をふるとぶつぶつとなにかを唱え出す。

「所長！ いけますか！？」

「重量軽減、筋力強化はした……、攻撃魔法もセットできた……オッケーよ！」

「では進軍を。マシユ、先導をお願いします。何かあつたら盾を構えられるように。でも、視界はちゃんと確保して。所長がついてこられる速度で移動すること」

「はい！ マシユ・キリエライト、進軍します！！」



嫌な予感はしていた。

向かつて いる途中で炎の巨人が倒れこむように崩れ落ちて、今までで一番大きな爆発音がした。

隠れながら、瓦礫を迂回しながら急いで、急いで、その先に。

「…………なんだあ、ちいとばかりくるのが遅かつたな」

杖を持つた青いローブの男が血まみれで、背を向けて立っていた。

その前で、焦げに焦げて原形をとどめていない塊が3つ、ゆっくりと消え去ろうとしている。

「……お前は、」

ジョニイの声に応えて、青いロープの男——キャスター——が振り返る。

ひつ、と所長とマシユの悲鳴が聞こえた。

男の胸部が吹き飛んで、肋骨と肺をさらしていた。そこにあるはずの心臓はまるで抜き取られたかのようにぽつかりとない。

血液が止めどなく滴り落ちて、体の隅からほろほろと光になつて崩れ始めていた。

「キャスターだ。まあ、もう死ぬがな」

それでも、理性のともつた目で、血まみれで吐血しながら。

その男はニヤリ、と笑った。

## 洞窟へ

「時間がねえ。俺はお前たちの敵じゃない。だから、お前たちが欲しがつてそういう情報をやる」

「……わかったわ」

どう見ても助からない。靈核に相当する部位がごつそりなくなつていた。それでなくとも、人間ならば死んでいる。この英靈が立つて喋つていることがそも異常だつた。生き残ることに長けた英靈か。

どつかりと座り込んだ側にオルガマリーが近より、それにあわせてジョニーも近寄ることになつた。マシユがそばで対応できるように控え、サンソンは離れたところで警戒をする。

本来はすぐにでもこの場を離れるべきではあるが、それではキヤスターが消えてしまふ。黙つて耳を傾ける。キヤスターはとある方向を指差した。

「桐生寺の裏に洞窟がある。そこに反転したアーサー王がいて、大聖杯を守つてゐる。元々聖杯戦争をしてたんだが、アーサー王から異変が始まつたんでね、アーサー王を倒

せ。

そいつの部下？って言えばいいのかね、反転した英靈のうち、ランサー、ライダー、アサシンは今さつきまとめて倒した。キヤスターの俺ももうすぐ消える。バーサーカーもやべえが、あれは一つ所にとどまつて動かねえんで近づかなきやいい。残るはセイバーのアーサー王とアーチャーだ。アーチャーは洞窟の入り口で侵入者を阻んでる。そこで、色んな宝具を矢にして撃つてくるし、近接戦闘もそこそこできる。……他、なんかあるか

「……あなたのマスターは？」

「……知らねえ、いつの間にか消えてた」

ふーー、と息を吐き出したキヤスターは、足がほぼ消え去っていた。

「まさか坊さんどもに押し流されたと思つたら、ペガサスにのつて特攻しながら心臓ぶち抜きにくるとはね……。このままだとアーサー王が勝者になんのかね」

「……特異点の原因が聖杯戦争？の優勝者になるつて、それつてまずいんじゃないのか」「まずいな。ものすごくまずい。でももう俺が死ぬことは確定している。…………悪いな」さらさらと消えていく。

会話がもたない。

ただ、ラスボスが聖杯戦争の優勝者になるということ以上に、その消滅がなにかとて

つもなくヤバイということを直感が告げてくる。たぶん、それはその場の全員が感じている。

「所長？ なんとかならないか。アサシンの宝具が一回きりっていうのもなんかひつかつたんだけど、なんか、こう、なんかサーヴァントの説明のときにあつたような、「なんかつてなによ！ えーっと、えーっと!? んか!?」

「……ひよつとして、令呪ですか？」

マシユがいった。

ジョニイは思う。入れられた変な入れ墨が、そんな名前だった。それは、マスターからのサーヴァントに対する絶対命令権。不可能すら可能にする。そういう、説明だつた。

「それだ!!」

「おいおい、もう消えんのは確定だつて言つてんだろ!?」

キヤスターですら慌てた様子だつた。

「令呪で消滅までを引き伸ばす。あんた、元々死にづらいから今残つてんじやないのか!? それをもつと強化して、消滅までに特異点を解決する、それしかない！」

「でもそれってジョースターと契約させるつてことよね？ それは駄目つてさつき散々話したじゃない!!」

「皆わかつてゐるだろ!?」このままキヤスターが消えることの方があつとやばいって!!!——  
告げる!」

「マスター!」

マシユの悲鳴がする。でも猶予がない。やるしかない。契約をすると決めた途端、勝手に溢れてくる詠唱をそのままに吐き出す。ぼくを背負つた所長は止めなかつた。

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の杖に! 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら、我に従え! ならばこの命運、汝が杖に預ける!」

「あーーーつ、だあ、くつそ!!! キヤスターの名において、汝の誓いを受けよう! てめえを我がマスターと認める!!!」

何かが繋がる。今までよりも、多く何かが持つていかかる。寒い。元から寒くて、布でましになつて、なのに、今。元よりもつと寒くなつた。

「くくくくつ!」

猶予はない。キヤスターが消える。腹に力を込めるといきつれたような痛みが走る。  
ああ、痛い。大丈夫、まだ生きてる。

「令、呪をもつてつ……命づる……消えるな、キヤスター……!」

「重ねて、命づる……消えるな、ぼくが敵をぶち殺すまで、持ちこたえろ、キヤスター……! 消滅が止まる。でも駄目だ、まだ足りない。」

「重ねて、命づる……消えるな、ぼくが敵をぶち殺すまで、持ちこたえろ、キヤスター……!」

！」

令呪二画の消費。薄く透けた状態でキヤスターの輪郭が戻る。

「無茶しやがる……！だが、助かった、まだもう少しはもつ！」

「…………つ、」

戦闘続行Aの力を、A<sub>三十倍</sub><sup>その三倍</sup>へ。スキルランクの一時的な上昇で、無理矢理に境界を維持する。

寒い。寒い。でも、まだ。意識がある。まだやれる。

「……靈体化させてもらう。ついでにはいく。だが、戦闘能力に期待すんな。会話もなんだ。維持に全力を注ぐ。マジで消えそうになつたら伝える。

……気張れよ、マスター！」

ヒュー、ヒュー、と喘鳴が聞こえる。やけに近いな、と思つて、それが自分の口から漏れている音だと遅れて気づいた。近寄ってきたキヤスターの手がふわりと頭を撫でたような感触があつて、そのままスッと消えた。ほんの少しだけ楽になる。

「何て馬鹿なことを！！！」

サンソンの怒鳴り声がする。でも、なんでだろう。少し遠い。いや、でも、聞こえているから。だから、大丈夫。

「大丈、夫……それより、移動を。残りは、アーチャー……」

「ええそうですね!! そうですとも!!

……っ、所長さん、マスターをお借りします。マシュは所長さんを抱えて！ サーヴァントの速度で移動します!! 目標は寺!!」

所長の背からサンソンの腕にうつる。目だけは閉じてなるものか。耳も閉ざしてなるものか。痛みを頼りに現実にすがり付く。

「移動します!!」



『…………はい、レイシフトでの帰還は出来るだけ早めに間に合わせます。恐らく後三時間……いえ、二時間でなんとかしましよう』

「そうしてちょうどいい。…………もう一度聞くけど、彼以外のマスターは、」

『…………コフインに乗っていたマスターは全員危篤状態にありましたから、冷凍睡眠にかけたところまでは所長の指示ですからご存知ですよね。続報として、爆破の衝撃でコ

「フインから弾き飛ばされたマスターが少數いましたが、全て死亡を確認しています。状況から見て即死でしょう。たぶん、ジョニイくんは、コフインから弾き飛ばされた上で生存して、そのままレイシフトに巻き込まれたのだと思います。外部と連絡が取れていませんから、救援が望めるまで、冷凍保存状態のマスターの復帰は無理です』

『……そう、それならやはり、コフインに乗つていなかつた私とマシユとジョースターがレイシフトした、そういうことなのね。そして、今回の特異点の解決は、キヤスターの消滅までという制限時間がある以上、追加の人員は間に合わない』

『……そういうことになります。キヤスターの消滅を留めたのは、聖杯戦争の優勝者には何でも願いを叶えるだけの力が与えられる以上、英断だつたとは思いますが、ジョニイくんの制限時間も短い。なんにせよ、時間との勝負ですね』

「わかってる、わかってるわ……レフ、…………。…………そうよね、もういないんだから助けてくれないわよね、私が所長で、マスターはこうなんだから、私がなんとかしなきやいけないのよね、あ…………」

『…………所長、』

「…………ええ、わかってる。通信切斷の時間も迫つてゐるのね? 今から二時間後、レイシフト後に会いましょう』

『はい。…………どうか』武運を』

夢うつつのような状態でぼんやりと通信を聞いていた。どうも、また意識がとんでいたらしい。やはり寒いのは変わつていなかつた。

「…………目が覚めましたか」

「…………サン、ソン、」

意識だけは、と思つてたんだけどなあ、と呻く。猛烈に寒かつた。視界の半分を張り出した屋根が覆つてゐる。たぶん、寺の軒下辺りを借りたのだろう。

視線を巡らせて、ひどい顔のサンソンと目があつた。

「サーヴァントとして、一言だけ。あなたのしたことは間違つていなかつた。時間がなかつたこともわかつています。でも、…………二度としないで下さい。肝が冷えます」

「…………謝らない、よ。」

「僕はあなたの刃です。あなたが望む通りに敵の首を落としましょう。でもね、マスター。あなたがいなければそれすらもできない。…………どうか忘れないで」

「…………うん」

誇張抜きに死にかけたのだと思う。腹を見下ろせば傷口を縛る布が変わつていた。冬木にきてからもう二度も死にかけている。あー、あー、と声を出してみて、どうにか詰まらずに喋れるように、声帯を動かす。

「…………起きたのね」

「うん」

所長も覗き込んできた。マシユも近寄つてくる。

「言うべきことはたくさんあるけれど、飲み込みます。マシユ、あなたもよ。ええ、時間がありません。通信が切れた時点で目覚めたのは運がよかつたわね。」

後二時間で、私たちはレイシフトでの帰還を強行します。それまでにこの特異点を解決する。いいですね？」

「うん」

納得のいかない、という顔を三人ともしていて、でも切り替える、と言葉を飲み込んだ。帰還に関しても、キヤスターの消滅に関しても、ジョニイに関しても、時間が足りない。

では報告を、とサンソンが手をあげた。

「先程、気配遮断を行つた上で洞窟の探索をして来ました。確かに入り口にアーチャーが陣取っています。朗報として、隙さえあれば即座に僕の宝具で首を落とせそうだとうことを報告しておきます」

「情報通りね。倒せると、そう判断したのはどうして？」

「僕の宝具は生前処刑された英靈に対し有利に働きます。……恐らくあの英靈、生前処刑されてますね」

「なるほど、そういう……」

「待つてください、それでは、あの、アーサー王を倒すのは難しいのでは？」

所長の命にしたがつて、ジョニイに対して言いたいことを飲み込んだのであろうマシユが、それには口を挟んでくる。

「アーサー王は処刑されていません。それどころか復活すら予言された英靈です。サンソンさん、あなたが処刑人であることから、処刑と関連がある宝具だというのはなんとなく察しができますが……」

「ええ、お見事です。僕の宝具は処刑台だ。いずれ死ぬという宿命に耐えられるかどうかで判定が決まる。それ故に、処刑された英靈には特に効果がある。ですが、それとは別に僕にはスキルがある」

処刑人。悪人、及び悪を行うものへの特攻。それをA++という高いランクで所持している。

「戦争を行い、街を滅ぼしたことは悪であり罪です。悪への特攻をもつて宝具の威力をあげます。明確な罪があるのに、断罪しないのは処刑人として有り得ない。ええ、綺麗に首を落としてみせましょう」

「じゃあ、つまり、二回の宝具展開が必要つてことよね？」

所長の話に言葉が止まる。宝具一回というのは、キヤスターと契約する以前の話だ。

それでも、一回きり。

「…………令呪が一つ、残つてゐる。それでアーチャーを倒す。もう一発は、うん、頑張る……」

「そうするしかないわよね……。それで特異点が解決するならギリギリでしよう」

また、マシユが何か言いたそうな顔をしてやめた。

「そうしたら、えーと……行こうか。連れてつてくれ」

「戦う以上、サーヴァントの性能にマスターとの距離が直結するもの。連れてくしかないのよね……マシユ、気持ちはものすごくわかるけど、帰つてからにしましよう」

「…………わかりました」

手当てをし直したから、布の残りが少なくなつていた。固定はそのまま、本當は所長にくくりつけたいところだつたが、布が足りないので諦めて背負われる。力が入らないのでぶらぶらと手足が揺れる。指だけ、何度も辛うじて折り曲げることは出来た。

サンソンが靈体化して、再び先行する。その後を追つて、しばらく山道を走る。やがて、サンソンは完全に氣配を消して、残りの三人が、マシユを先頭に洞窟の入り口まで到達した。

「…………ほう、殺す前から死にかけとはな。人類最後のマスターは穏やかに死ぬのでな

く、女に背負われて無様にとどめを刺されるのがお望みか?」

アーチャーが立っていた。全身が黒く染まっている。とつくな昔にぼくらの接近には気づいていただろうに、それでも律儀に入り口で立っていたくせに、口を開けば皮肉だつた。

「うるさい、あんたをぶち殺してぼくは先にいく」未来

「口だけはよくまわる……いや、口しか回せないのかね」

「マスターは、私が守ります……」

アーチャーが無造作に構え、マシユが射線を遮つて立つ。

「スキル、展開——

——“奮□□つ決□の盾”！」

本来扱えるはずではあるが、未熟故に未だ扱えないそのスキルを、マシユは気力で展開した。

その瞬間、健気にマスターを守つて、震える足で敵を見据える姿に、誰もが、何故だか目が離せなくなる。

「だから、なんだと——！」

吸い寄せられた視線の通りに、アーチャーが矢を放つ。その攻撃後の一瞬の硬直の間に勝負はついていた。

「——刑を執行する。  
 死は明日への希望なり」

真名解放とともに処刑台が顕れる。黒い手がアーチャーを引きずり込んで処刑台に固定し、抵抗の間もなく刑が執行された。ポカン、と口を開いたまま、その首が落ちて消える。少し間を置いて、完全に消滅したことを確認した。

「……とりあえず、令呪で先行して命令しといたのはよかつたな」  
 ぽつりと呟くと、所長が大きく息を吐き出した。

「戦闘に入つたら、言葉も魔術も挟む暇がなかつたわ……。早い、わね。それに、マシユ、あなたのそれは……」

「……本来は使って然るべきのスキル、だと思います……。今の私には、攻撃一回分、一瞬きりの使用しかできませんでした……」

「いえ、充分でした。攻撃も充分に防げていましたし、それが出来るのなら、きっと宝具も偽装展開が可能でしよう」

「うん。サンソンもだけど、マシユも……、ありがとう。なんとかなつたのは、君が頑張つてくれたからだ」

「……つ、はい、はい……！マスターも、頑張つてます。どうして、と思うときもあります……すけど、頑張つてるんです、私も頑張ります……！」

「……うん」

ふーー、と息を吐く。いよいよ寒くて、指先の感覚がなかつた。

「今回のでなんとかなつたつてことは、つまり、相手に宝具もスキルも使わせてはいけないつてことだ。使えたこつちが勝てたんだから……、今みたく、速攻できめる」

「はい。……マスター、大丈夫ですか」

「……寒いよ」

サンソンの心配に、それしか言えない。元より死に体、手足も体もろくに動かせない。華奢な女性に背負つてもらつて動いている有り様だ。だから、口出しだけは、せめてやめない。

「でも、大丈夫、大丈夫だから……、早く終わらせて、皆で家に帰ろう」

「……ええ、そうね。皆でカルデアに戻りましょう」

「……ええと、その場合、僕もカルデアにお邪魔することになるんですか？」

「あー……、そうなるでしょうね」

「ということは、サーヴァントの先輩が増えるのですね！お話するのが楽しみです！」

ジヨニイが、もうどこに帰るのかも明確に言えないほどに朦朧していることに気づきながら。それでも、四人は洞窟の奥へと歩き出した。

# 怨敵邂逅

また、声が遠かつた。

「死にかけのマスター、気配遮断の下手くそなアサシン、震えた女。だが、その娘は面白い。試してやろう」

馬鹿にされた気がする。ぼくも、サンソンも、所長も。

「約束された勝利の剣！」

「マスターも、所長も!!! 私が、守る!!! あ、あ、ああああああ!!!!」

熱と壁がぶつかって、その隙に。

「気配遮断は確かに三流ですが。僕は暗殺者ではなく処刑人だ。

『死は明日への希望なり』――!!

「なんつ、だこれは……！」

「貴方は街を破壊した！ 貴方は僕らを殺しかけた！ それを罪として！ 僕は貴方を処刑する！！」

「う、あ、ああああああああ！！！」

「ごとん、と何かが落ちる音がした。ごつそりと何かが持つていかれている。寒い。寒い。ひたすらに寒い。凍えきっている。でも、まだ。まだ。駄目だ。

「セイバーの消滅を確認しました……！でも、その後に、あれは……？」

「水晶体、でしようか？」

突然光が巻き起こる。なに、だれ、なんだ？

「キヤスター!?」

「あーくそ、時間切れだ……、だが、よし、よし、よーし！お前らほんとによくやつた!! セイバーは倒れ！俺は敗北による消滅でなく、強制退去が始まってる！アサシンも！嬢ちゃんも!! 所長も!!……そんで、マスターも。あんまり聞こえてなさそうだが、うん、ようやつた！」

喜んでる。キヤスターが。いや、全員が。キヤスターは、でてきてよかつたんだつけ、おわったから、いいのか？

「キヤ、スター……？」

「ああ、なんだ聞こえてんじやねえか。おう、終わつたぞ。やり遂げたんだ、誇れ！……つてやつぱ時間がねえな、ええい、お前の歩む道筋に、どうか幸あらんことを!!」 消える直前に、キヤスターが何かをしてくれた。ほわりと、暖かくなる。寒くない。暖かさを噛み締めて、その暖かさが身体中に巡つていくのを確認する。なんだかさつき

よりもものがよく見える。サンソンが近くに戻ってきた。

「終わったようです。マスター？ 大丈夫ですか？」

「……ん」

声も、さつきほどは遠くない。

「ちょっとしやんとしたかしら？ キャスターが魔力の譲渡をしてくれたみたいだけど……それでも反応が鈍いわね……やっぱり早く戻らないと……、とりあえずマシユ、あの水晶体を回収してきてちょうだい。そろそろカルデアから通信がくるはずよ、たぶんそれが原因でしようから、持ち帰つて調査しないと、」

「それには及ばないよ」

知らない男の声がした。いや、知っているのかもしれない。どこかで聞いたような気もする。

「…………レフ？」

「そんな状態でこちらにくるのはつらいだろう、僕が回収しておこう」

「レフ？ レフなの!?」

所長の今までにない叫び声と、衝撃。全身が地面に打ち付けられる。悲鳴も漏らすことができなかつた。所長に振り落とされたのだと理解する。肺につまつていた空気をしこたま吐き出して、ひきつる腹では咳き込むことも出来ずにただ悶える。

マスター！と叫ぶ声と、抱き起こしてくれたサンソンの顔が霞む。

「死にかけ、まさに死にかけだ。そのまま放つておいたら半日ももたずに死にそうだつたから、そのまま死ねと放逐しておいたのに。一般枠のみそつかす。それがここまでやるなんて、……ああ、認めよう、僕の失態だ」

『…………レフ教授か？』

「おや？ その通信はロマニか？ 君は生き延びたのかい？ すぐに管制室に来るようによつたのに……ああ、どこかでサボつていたのか、それで到着が遅れたのかね？ 全く、どうしようもない……」

空気が変わる。どうしようもなく、重く、冷たく、刺すようなものに。庇うようにサンソンはぼくを抱き締めて、右手には大剣を。その前に、盾を構えたマシユの背中が見える。隣にあつたはずの所長の足は、ふらふらと、マシユを邪魔だと言わんばかりに押し退けて、この空気の元因 レフの元へ駆けよつていく。

「だめ、だ、所長……！」

「レフ、レフ、レフ、レフ！！ああ、よかつた！ 生きていたのね!! 生きてるマスターは今にも死にそうだし!! 予想外のことばかりで、私どうにかなりそうで！ でも、あなたがいるなら大丈夫なのよね、なんとかしてくれるのよね!?」

「……ああ、なんだ、何でいるのかと思えば。オルガ、君はもう死んでいるじゃないか。

それでレイシフト出来たと

「…………え？」

何を、いつているのだろう。

「体が死んだからと、死して尚思念体だけでレイシフトするだなんて、君はどれだけレイシフトしてみたかったんだい？だがもうカルデアにも戻れない、ただ消えるだけだ」

今、なんて？

カルデアに戻ろうと、所長と、約束したのに？

「ああ、でも、帰りたいよな？」

その男の隣に、何かが開く。開いた穴の向こうに、真っ赤に染まつた球体が浮かんでいる。

「ご覧、カルデアに繋げてあげたよ。ほら、君の大好きなカルデアスだ。もはや人類の生存を示す青色はどこにもない。あるのは燃え盛る赤色だけだ。これが今回の任務の結果だよ」

「なに、これ……、そんな、なにこれ、なによこれ!!なんなのよ!!!」

「ああ、全くうるさいなあ。うるさいけど、まあ、僕は慈悲深いからね。そら、大好きなものと一緒になるといい」

所長と、マシユと、たぶんぼくの、叫び声。サンソンだけは沈黙していたけど、抱く

手は痛いほど強かつた。はつきりしてきた視界の向こうで、不自然にあいた穴があつて、真っ赤に燃える溶鉱炉のような球体にずぶずぶと沈みこんでいく所長の姿が、「…………さて、では名乗ろうか。レフ・ライノール・フラウロスだ。貴様たち人類を処理するために遣わされた、2015年担当者だ。カルデアは不要になつた。聞こえているかな?ドクター・ロマン」

『……カルデアが、不要になつた?』

「ああ、そうだとも。未来は既にない。全ては焼却された。人類はここに絶滅したのだ。カルデアはカルデアスの磁場に守られているから残っているだろうがね、外界は、すべてこの街と同じく終わっているのだよ」

『……つまり、救援要請を送つても、答えがないのはカルデアの機器が壊れているわけではなく、そもそも受けとる側が存在していないと』

「ああ、うん。さすがに飲み込みがはやい。その通りだ。ああ、もはや、誰もこの偉業を止めることはできない。これは人類史による人類の否定だからだ。貴様らは、自らの無能さに、自らの無価値ゆえに我が王の寵愛を失つたがゆえに、終わるのだよ」  
長つたらしいそのやり取りが本当なら、連想できることがある。

「…………おい……待てよ……!」

「なんだい、死ぬ三十秒前のマスターくん」

「つま、り、お前……つ、ぼくの、家族も友じ、んも、……ツゲホツ、なにもかもを、皆殺しにしたって言つてるんだよな?!」

「その通りだ、同じことを一回も言わせないでくれたまえ」

嘲笑うように言い切った男がいた。目の前が真っ赤に染まる。どこにそんな力が残っていたのかもわからなかつた。地面に再び顔を打ち付けて、はじめてサンソンの腕を振りほどいて目の前のそいつをぶち殺そうとどうにかもがいたことに気づいた。

ハアーツ、ハアーツ、と無様に荒く息を吐く。せめてもと震える指をどうにか握り、顔も腕も体も何もかもを起き上がらせる力は既になく、全身を泥にすり付けて、それでも尚、まっすぐ指をその怨敵につきつけた。

「つまり、あれだ、あんた、ぼくちゃん黒幕ですよ、どうかどうか倒してくださいって、わざわざ出しやばつてきてくれたわけだな? ああ、いいとも、お望み通りぶち殺してやる……!」

男は、虚をつかれた顔をして、  
一拍。

「ギャハ、ギャハハハハハハハハ!!! 笑わせてくれる！そんな虫けらのような様で!!! この僕に！指差して呪いの言葉をはぐどは!!! ハハハハハハハハ!!!! こんな！！！こんな反吐がでることもあるまい」

ばすん、と何かがうちこまれた感覚がした。

「呪いを返そう。君は死ぬまで這いつくばっているといい。だがまあ……すぐに死ぬから関係なかつたかな？」

「みしみしと、何かが腰部に根をはつていく。

「う、わ、あ、あ、あ、ああああああああああああああああああああああああああああではさらばだ諸君！」

!!!!!!

笑い声と共にレフ・ライノール・フラウロスが消える。

既に世界が崩れかけていた。叫び、のたうちまわりながら暴れるジョニーをどうにか押さえつけながら、サンソンは叫んだ。

「マシユ！こちらへ!!ロマニだかロマンだか知りませんが、早くレイシフトを！」

『もうやつてる!!その空間が消える前には完了するから、出来るだけ固まつてくれ！ダヴィンチちゃん、出現予想地点で待機を！』

「わかった！…マシユ、マスターを押さえるのを手伝ってくれ、このままじやこの人は自分で自分を殺してしまう！」

「はつ、はい!!」

悲鳴と怒号が光にのまれて消えた。

—汚染炎上都市冬木、修復—

## 二人目

「皆様お疲れ様です！…………あの、」

「ああ、マシユか……、うん、ありがとう。大丈夫、手術は成功したよ」

「…………よかつた……！」

「こらこら泣くんじやないよ、目が真っ赤になつてしまふ。後回しにして悪かつたね、これからは君のメデイカルチエツクを、」

「いえ、あの、……マスターの状態を聞いてからでもいいでしようか。それに、皆さんにも休息を、」

「…………そうだよね、聞きたいよねえ」

「とりあえず、命は繋ぎ止めた。すごいよなあ、ジョニイくん。彼、手術中、どんなになつても心臓だけは絶対に止まらなかつた。死んでたまるかつていう強い意思があんなに体に反映されてるのも始めてみたよ」

「科学的にはオールオッケーだね、心配してた脊髄損傷も魔術的な方面からこう、綺麗に整えることはできたよ」

「つまり、マスターは歩けるようになるんですね！よかつた…！」

「…………」

「…………」

「…………あの？」

「いや、魔術的に整えて、科学的にも神経も繋がつたからね、なにも問題はないんだ。  
本当になら」

「…………呪詛が残つてる」

「…………！そんな、」

「…………たぶん、最後のレフの呪術だろうね。彼の腰部に巢食つて解呪ができない。

それでも、いやほら、ダヴィンチちゃんは天才だからね？専門外でも頑張つてくれて、  
痛みとか、そういうのを与える部分は解いてくれたんだ」

「…………でも、一番肝心のところを消してあげられなかつたんだよねえ……。あの子  
は、…………ジョニー・ジョースターは、呪いを解かない限り、立つことも歩くこともで  
きない」

「…………いやだなあ、そんな彼に、それでも世界を救つてくれつて言わなくちやいけな

い」

「ドクター、あの、」

「！ああ、ごめんね、口に出しちゃつてたかな……はは……」

「…………他のマスター候補の方は、その、」

「人理修復しない限り、蘇生は無理だね。」

…………こればっかりは、仕方ないかなあ……、今後、また状況が変わつてくればなにかやれることも増えるかも知れないけれど、どうしたつて、人類最後のマスターはジョニイさ。勿論私たちだつてこのままにしどうなんて思つてない。そもそも、呪いさえとければ歩けるようになるんだしね？」

「そう、ですか…………」

「今やれる最大の手は尽くしたんだ……すまない。早急にやれることがあるとしたら……、そうだ！ジョニイくんが回復したら、サーヴァントの召喚をすすめるべきだと思うんだけど、どうだろう」

「……キヤスタークラスのサーヴァントだつたら！」

「いいね！神代の魔女とか引き当てれば解呪もできそうじゃないか！」

でも、いやまあ私もキヤスタークラスなんでね？魔術のね？勉強とかね？もつともつと頑張るけどね？なんかどーもあの子自分の作品みたいに可愛くて仕方なくつてさ、なんでもしてあげたくなっちゃうんだよね」

「…………」

「…………」

「ん? なになに?」

「…………あの、ダヴィンチちゃん? 君の、あー、同性愛指向? いや今の状態だと異性愛になるのか? えーっと、その辺に關しては、僕らはなんにも口出しする気はないけどね? それがジョニイくんに向かうつてなると、ちょーっとあの、口出しせざるを得ないっていうか……」

「なんだい、失敬な。あの子に對しては母親みたいな気持ちになれるつていっただけじゃないか」

「! ああ、すまない、とんだ邪推を、」

「まあそれはそれとして好みだけど」

「「えつ」「」

□

「…………サンソン」

真っ白なマイルームで、点滴に繋がれている。元はメディカルルームにいたのだが、部屋に戻りたいと熱望したらこうなつた。まだ外せない酸素吸入器が白く曇つては戻りを繰り返し、シュー、シュー、と音をたてている。

「いいよ、現界してくれて大丈夫って、口マンが言つてたの、聞いてただろ。そこにいるんじゃないのか？」

すう、と覗きこむ形でサンソンが現界した。思つたより近いところにいて、ちょっとだけビビる。

でも、それ以上に、気遣わしげな表情が痛い。

「…………そんな顔しないでくれる？笑つてくれよ、ぼくの足、あのとき余分なことをいつなきや普通に動いてたんだって！！」

「……ドクターはそんな言い方はしてないでしよう」

ロマンから、説明を聞いた。今、自分の体に起きていること。これから先カルデアがしたいこと。

「特異点を解決すれば家族も友達も、みんなみんな甦る。それは、いい。とつてもいい知

らせだ。遠慮なく人類の敵を倒して世界を救うとするさ。

……でも、ぼくの足は?……ははつ、レフをぶち殺しても、呪いがとけるとは限らないんだ!」

「マスター、ドクター」が提示していくたのはそれだけじゃないでしよう。解呪の逸話があるサーヴァントは数多い、そのどれかを召喚できれば、なんならレフに出会う前に五体満足になれるかもしませんよ』

「なれるかもしれない、だろ……」

歩けない。その事実が、安定したマイルームにいる中、思つたより心にきている。臆面もなく涙が溢れてきて止まらなかつた。マスクに到達した涙がそのまま横を滑つていく。

心なしか驚いた顔をしたサンソンが、それでもじつと視線をあわせてきた。

「なにが一番あれかつて、ぼくはこんなになつても、なにも間違つたことをしていいつて思つてるつてことだ。ぼくの大好きな人たちも、そうでない人も、気にくわないヤツも、せまつくるしい家も、なんてことない通り道も、牧場で待つてゐるあの馬も、なにもかも皆殺しにして消し去つていつた男に、宣戦布告のひとつもしない方が間違つてるだろうつて、そう思うんだ、ぼくが成しとければ皆よみがえるんだから、それでいいやなんてことは決してない。そうだろう?だからといつて、そう、思つてしまつてゐつてこ

とが、でも、歩けない、歩けないんだ、ぼく、」

ひく、としゃくりあげる。喋つていることも支離滅裂になつていてもわかつた。でも、吐き出してしまいたかつた。ぎゅう、とサンソンが手を握つてくれる。それは少し痛いくらいで、でも、さらに泣けてきた。

「マスター、マスター、ええ、その怒りも悲しみも正当なものだ。だから、……いえ、泣かないでなんて言うべきじゃないですね、泣いていい。思いつきり泣いてください。見てているのは僕だけだ」

「今こうなつてるのはぼくの自業自得つてやつなんだろう、でも、でも、ああつ、ううう、ううう～～～！」

「……側にいます、マスター」

怒つてているのか、悲しんでいるのか、もう、よくわからなかつた。癪癩をおこしていふのかもしけなかつたし、ひたすらに殺意をためてゐるのかもしけなかつた。ばたばたと手足を動かしているつもりで、足だけはぴくりともしていなのが見えてしまつて、もう、どうしようもなかつた。

ひたすらに泣きわめいて、落ち着いた頃。サンソンが一度マスクを外してくれて、涙とか鼻水とか色んなものを綺麗にしてくれた。

「…………なんていうか、君には助けられてばっかりだ」

「僕はあなたのサーヴァントですから。それに、」

「それに？」

医者か？といつてくれたことが。いてくれた方が嬉しいといつてくれたことが。

思つたよりも嬉しかつたのだ、なんて。言う必要のないことなので。

「…………なんでしょうね、庇護欲がわいたんですかね」

「ぼくはあんたの子供かなんかか？」

「子供にしては大きいですね」

「…………いうかさ、その敬語、やめてよ」

「え？」

きよとんと目をしばたかせたサンソンに、なんとなく安心感を覚えたのはなんでだろ

うか。

「主人マスターと従サーヴァント僕つてやつ、なんかどうもぼくらを表すには、かたつくるしいつて思うんだ

よ

「そう……ですか？」

「そうだよ、これから長い付き合いになるつていうのにさあ！友人とか、相棒とか、そういうのの方が絶対いいつてぼくは思うね」

「相棒ですか。…………それは、いいね、とてもいい」

「だろ～～ツ？ ねえ、ジョニイって呼んでくれよ。ジョーキッドとかジョジョとか呼ばれたりすることもあるけど、ジョジョっていうと、うちの一家全員が“ジョジョ”だからさ」

「一家全員がジョジョ、というのは？」

「ウチ、八人兄弟なんだけどさ、母親が何人もいるんだ。父親は一緒」

この話をすると、大概の人は形容しがたい顔をする。案の定サンソンもそんな顔をしていて、くつくつと笑う。

「……ええと、お悔やみを申し上げます？」

「母親は誰も死んでないよ、父親がとつかえひつかえ何人かの女に子どもを生ませては、引き離してひとつところに集めてるのさ。皆、クズな父親の名字は絶対名乗りたくないから、母親の名字を名乗つてる。だから、そうだな、長男の定助と四男の仗助は二人とも東方を名乗つてるけど、次男のぼくと六男のジョセフ、七男のジョナサンはジョースターを名乗つてる。名字で母親が一緒かどうかわかるって寸法さ。

そんで、面白いんだけど、名字と名前を繋げたり、もじつたりするとみーんなジョジョになるんだ」

「…………」

サンソンが理解が追いつかない、という顔をしていて、腹を抱えて爆笑しそうになつ

た。包帯でぐるぐる巻きの現状、それは物理的に無理だつたが。

「あのね、複雑だけどね？簡単なんだ、ぼくらは兄弟なんだから。それでいいんだよ」「……そういうものなのかな？」

「そーそー。まあ、だからこそ、こう、ぶちギレたつていうか」

「……」

無言でさつとティッシュを構えたサンソンに今度こそ声をあげて笑つた。

「大丈夫。いや、大丈夫じやないけど。なんていうか、今、大丈夫になつた気がする」

「それはよかつた」

「ね、今度はあんたのことともおしえてよ」

「君みたいに面白い生まれじやないけどね、それでもよければ」

「ああ。いっぱい話そう」

それは、所長には出来なくなつてしまつたことなので。

ジョニイのマイルームには、しばらく談笑する声が響いていて、やがてドクターストップがかけられるまで、それは続いた。

□

「……えーっと、それで、召喚？だっけ？一回してるけどいまいちよく覚えてないんだけ  
ど」

「呼び出されてすぐマスターがスプラッタだつた僕の気持ちわかる？」  
「……それはごめん」

ジョニイは車イスに乗せられて、大仰な機械の部屋につれられてきていた。

サーヴァントの追加召喚が目下の目的で、大分ジョニイの様子も落ち着いてきたの  
で、やつてみよう、ということになつたのである。

「……なんだか、仲良くなつてますね」

「喋つてたのは知つてたけど、いつの間に…、よし、マシユも負けないようにしてやる  
具体的には召喚が終わつたら混ざりにいこう！」

「はい、マシユ・キリエライト、頑張ります…！」

部屋の隅っこの方で、なにやら違う話をしているマシユとロマンは置いておいて、サ  
ンソンはジョニイを部屋の真ん中からやや離れた位置においた。そのまま壁まですつ  
と下がる。

「さて、おーい、ジョニイくん！君に虹色でトゲトゲした石を渡したでしょう!? 4つちゃんとあるかい?!」

「大丈夫!!!」

「施設爆破の影響で流石に色々足りてなくてね！その魔術結晶、魔力が貯まつてゐるようなどころに自然発生するんだけど、このダヴィンチちゃん！天才なので!!! その石を色々足りないもののかわりにする技術を発明しました!!!」

「それは！すぐいね!!!」

存外部屋が広いせいで、叫びながらの会話になつてゐるのは愛嬌か。

「まあほんとは召喚の詠唱とか！いろいろあるんだけど!!! めんどくさいと思うんで!!! そ  
の辺適当で!! 気分で大丈夫です!!! なんならこういうサーヴアント来てほしいなつて祈  
る儀式とか勝手に考えてくれてもいいよ!!!」

「キャスターアアアア!!!!」

「そうだね!!!」

現状、ジョニイの解呪が優先なので、出来そうなキャスタークラスを呼びたい、とい  
う事で話がまとまつていてる。特異点で出会うことができたら、解呪も勿論だが聖遺物を  
ねだつていくようにしようと決めていた。

だが、今回は聖遺物も何もないでの、完全に運、ないしはジョニイの縁召喚で、とい

うことになつた。

「用意はいいかい????」

「オツケー!!!!」

「そしたら！その石4つ!!ぶん投げちゃえ!!!!」

「オラアアアアアアアア!!!!」

雑だなあ、と呟くサンソンの横で、勢いって大事だよね、と遠い目をするロマンがいた。マシユはわくわくした顔で見守っている。

カツ、と部屋が光つた。その光が回転して収束し、三本の輪になる。

「サーヴァントだ!!!」

ロマンが叫んだ。

サーフティとして、多少の備えができるよう、そのサーヴァントが召喚される前に、何者であるかを簡易的に示すセイントグラフが顯れる。

カードが示すのは、

「キヤスヌー！キヤスターだよジヨニイくん!!」

「マジで!!!」

杖をついた老人が記された銀色のカード。それが次の瞬間にはばちりと雷光が走り、金色に光る。

「なにこれ!!」

「あんまり召喚に応じないサーヴァントがきてくれた感じかな!!期待していいんじゃ、」  
カードの下に、光が集まる。収束して、人の形になっていく。  
わくわくしながら皆が見守つて、それで。

「サーヴァント、キヤスター！トーマス・アルバ・エジソンである！大統王にして発明  
王、ここに参上した!!!」

顕れたライオン頭の筋肉隆々の男が大きく吠え。

「「「「…………え？」」」

召喚ルームは沈黙に包まれた。

# 準備万端

「いや／＼はかどつたはかどつた」

「うむ、たまには共同発明なんてのもいいものだな!!」

カルデアの廊下をマシユに車椅子を押してもらいながら移動していたら、ダヴィンチちゃんとエジソンに出会つた。若干煤けているものの、それなりなハイテンションで探してたんだよ！と駆け寄つてこられたので素直にマシユと立ち止まつた。

未だに獅子頭の筋肉隆々の大男がエジソンだと言う事実に頭がぶつ飛びそうになる。狙つていたキヤスタークラスなのは当たつていたが、違う、そうじゃない、と総ツツコミがはいつたのは当然だつたと今でも思つてゐる。落ち込むより先に外見のインパクトと本人の破天荒さに引っ搔き回されたので、それはそれでよかつたのだと思うけれど。ぶつちやけ彼の召喚はアメリカの定義を疑う事件だつた。

まあそれを言い出すとダヴィンチちゃんもなかなかなのだけれど。理想の女性モナ・リザが好きなので、自分もなつてみたとか意味がわからない。

「あの、明日には発見された一つ目の特異点へのレイシフトが決まっていますが、今までお二人はなにを…？」

それはそれとして、言いたいことをきつちり代弁してくれるマシユはすごいと思う。正直こんな妹も欲しかった。

なんせ気づいたら一人してしばらく姿が見えなかつたのである。エジソンとはコミニケーションとか連携の相談とかしたかつたのに。ロマンなんかは頼りにできる人材がすっぽりいなくなつてしまつたせいでの過労死寸前だつた。

でも、そのマシユの問いかけに、二人してドヤ！と胸をはつて返してきた。  
「もちろん発明である！具体的に言うと、マスターの旅の手助けをする発明だがね。このエジソン全力をもつてさせてもらつたとも！」

「私は戦闘手段の発明だね、魔術礼装的な？カルデアの制服も充分魔術礼装としては一級品なんだけど、やっぱりジョニイくん専用の品があつた方がいいかなつて思つてね」「それを二人ともどつちが役に立つものを作れるかつて競争してたんだがね、お互いでつてるものに口出ししあつてたら競争つていうか共同開発になつちやつたつていう

か」

「まあ、便利なのは保証するからさ！・さ、ずすいと見に来ておくれよ！」  
マシユと顔を見合わせる。

自分のためにと言われてしまうとちょっとそわそわしてしまう。ロマンには悪いけれど。

「えーっと……どうする？」

「戦闘シミュレータでの実戦訓練に付き合つて頂く予定でしたが、今までこなしていますし。マスターにお付き合いします」

「サンキュー、じゃあ、そういうことで案内された先にあつたのが。

「えーっと……車椅子と……なんだこれ、枯れ枝? ねえ、なにこれ……、なんの変哲もない、というにはちょっと鮮やかでアメリカンな塗装がなされていてが、一つは一応普通の形をした車椅子だつた。もう片方は、干からびた枯れ枝のようなもの。子どもが握つて落書きをしそうな感じの枝にみえるものだつた。

「最初はグー! ジゃんけんぽん!!」

「……えーっと…」

それを質問しようと振り返れば発明者達のじゃんけん大会である。

「ふははははは!!! 勝利の!!! チョキ!!!」

「くううううなぜ私はパーを出したんだ……叡智の敗退……かなしい…」

「……」

「どうしようマシユ、やっぱ戦闘シミュレーションする?」

「それがいいですね、では移動しましょう」

「待つて!」

発明者どものテンションがおかしいなとは思っていたけども、おかしいというかS o C r a z yなことになつていて。

「説明する順番を!決めてただけだから!!」

「帰んないでジョニイくん!!お願ひ!!!頑張ったから!!!」

「いいけどさー、明日だぞ、明日!気持ちはスッゲー嬉しいけども!これからさあ遠足にいくぞつて玄関出る時に、やっぱアクセサリー変えてくるとか二階の窓ちゃんとしめたか不安だとかさー、必要だろうけど今そういうかつて感じのことを急に言い出す母ちゃんみたいな真似しないでくれっての!」

「悪かつたつて……んんつ、ごほん!じゃあ!私が紹介します!!!」

エジソンがすすーっと差し出してきたのは車椅子の方だつた。車椅子にアメリカ国旗をペイントするその根性に敬服する。

「うーん予想通り」

「やっぱりそつちがエジソンさん主導だつたんですね……」

「私が紹介致しますのはこちら!エジソン式直流電動車椅子です!」

まずはとりあえず座つてみて下さい！」

ひよい、と抱き抱えられて椅子を移動させられる。抱き抱えられることに最初の頃はプライドがへし折れかけたものだつたが、最近は開き直つて抱っこがうまいやつ選手権を脳内で開催してしたりする。ちなみに一位はサンソン、二位はロマンという結果である。医療従事者は流石だつた。

すとんと見た目けばけばしい車椅子におろされて、おや、と目を丸くする。

「うつわ何これ、ソファーミみたい」

「そうでしようそうでしよう！快適な座り心地を追及致しまして、こちら最高級ソファーと変わりのない座り心地を実現しております！床擦れ防止機能も完備！」

そしてなんとシートベルト付き！激しい移動にも滑り落ちないよう、がつちりあなたをサポートします！もちろんこちらもクツシヨン付き、どんな衝撃にもあなたの皮膚を傷つけるようなことは致しません！」

下半身がまるつと麻痺しているので、座位こそなんとか保てはするものの、全く踏ん張れない身としては嬉しい機能だつた。

「そして！……まあシモの話しになつてしまふが、長く旅する以上、ミセスマシユも無縁ではいられないと思うのでね。マスターもその辺は思うところはあると思うんだが……」

「ああ、それね」

人間なので生きている以上は排泄をする。時代を遡る任務である以上、ウォシユレット完全完備の水洗トイレなんかは期待するだけ無駄なのは当たり前なので、おむつであつたりの非常手段をとらざるを得ない、という結論に至っていた。

その辺ダウインチちゃんが解呪の際にめちゃくちゃ頑張ってくれていたので、排便反射的なものはなんとか残っている。知らないうちに垂れ流しこういう文字通りクソツタレな羽目にならずにはすんだものの、どちらにせよ排泄の際は座位になる必要があつたし、一人で処理するのはどうしたつて無理があつた。悲しいことに。

「サンソンにその辺の手伝いはお願ひすることになつてゐるよ。一応非常時のために介護の一環でマシユにもおむつ替えたりとか処理の仕方とかのやり方だけは覚えてもらつてるけど」

「はい、介護知識というか、介助のやり方は一通り学んでおきました」

「……悪いねほんとに……。まあ、女性にはシモの世話は頼みたくないから覚えるだけにしてもらつたけど……、ぼくにもまだプライドあるし。」

その辺サンソンなら医療の心得もあるし、わりきつてお願ひできるからね。男性サー・ヴァントだからその辺エジソンにも相談したかつたんだけどな／＼いなかつたからな

」

「それは…ごめんね!!!」

「んん、と咳払いをして、エジソンが肘置きをぱかりと開いた。  
「ええとそれでは仕切り直して。こちらのアームレスト、開くとボタンがあるのですが  
「ほう」

「あつすいません、ちょっと失礼して、一旦おりて頂く必要があるので、はい。それで、  
これをこう、この順番で押すと、ソファ的な座り心地の部分が引つ込みまして、変わり  
にウォシユレット付きのお手洗いがあらわれます」

「ハアツ!?」

「排泄物はこちらの完全消臭密閉型ポッドに格納されるので、ほら、これをこうして  
「あー一つ座つてもポッドに手が届く位置じやん！」

「排泄後はこれを捨てるだけ！一人でお手洗いが可能です！ポッドは有機素材で出来て  
いるので地面に埋めるだけでオッケー！川に流しても可！ポッドは使い捨て式ですが、  
圧縮格納して三ヶ月分を持ち運び可能です！洗浄などに使う貯水タンクは完全循環式  
！定期的にフィルター交換するだけでオッケーです！」

「やつベー……マジやつベー……。ぶつちやけ便所で人理修復するようなもんだけそ  
れを差し引いてもめっちゃありがたい…………」

「…………まあ、排泄行為というのは、人間の尊厳と密接に関わるものだからね。誰かに股

をふいてもらうなんてのはベビーのときだけで充分だろう？モード変換の時に逐一降りて貰うことになつてしまふのだけは難点なんだが……。最悪貯水タンクの水は飲料水にも出来るように洗浄回りの機能は万全にさせてもらつたよ。

そういうわけでその、踏み込むのもどうかとは思つたが、世界を救うのが快適ではないなんてことはないだろう？私なりに考えて頑張つてみたんだが……』

「入院生活みたいなのしててそれは身に染みてたし、諦めてもいたんだけど……、めちゃくちや嬉しいよ、ありがとう」

「そうか、それはよかつた。その喜びが発明家にとつては何よりも報酬だとも！」

よし、それでは最後の機能を説明しよう!!」

「まだあるんですか!?」

全自动自走式便所モードから車椅子モードに戻すと、エジソンがもう一度椅子に座らせ直した。

「さて、マスター。そいつは勿論車輪を手動で回しても移動が出来るようにしてあるし、そつちのアームレストのコントローラーで時速30kmまでの自動走行も可能なんだが。

どんな悪路でも絶対がたつかずに走ることが出来るように、ダヴィンチちゃんと改造をほどこしました」

「お手洗い回りとか座り心地関連も勿論手伝つたけどね？一番はそこかなあ」

「まあとりあえず動かしてみてくれたまえ」

最初にコントローラーでの移動を試みる。ソファ的な座り心地も相成つて、車椅子とはとても思えない移動の仕方だつた。

続いて手動で車輪を回してみると、自重も感じないくらいスムーズに回る。

「……なんかめちゃくちやスムーズだけど」

「こちら!!なんと!!!ちょっと浮かせることに成功しました!!!」

「ええー…」

「まさかのホバークラフト……」

「お手洗い付き全自動ホバークラフトアメリカン車椅子つて盛りすぎでは……」

マシユが覗きこんで、手頃な紙をすつと車輪の下に通すと確かにつつかからずに素通りしていた。

「すごい技術ですね…」

「えつそれつて車輪いらなくない？」

「いや、直流電動なのでね。必要な電気は車輪の回転からチャージ出来るようにしてある。太陽光発電用のパネルとかも仕込んであるにはあるんだが、それだけだとちょっと足りないので、日光に当てつつ適度に手動運転をお願いしたい」

「あーなるほど。わかつた」

「それから、出来る限り頑強には作ってあるが、サーヴァントの攻撃を十回も受けければ壊れてしまうので、その辺は気をつけてほしい」

「十回つて時点で破格だけどね？魔術的にも防護を重ねてそれだけ、でも用心してくれたまえ」

「はい、マスターに敵を近づけないようにします」

「まあ普通はその時点で死んでるけども」

はつはつは、と笑って、うむ、とエジソンが頷いた。

「大まかな説明は以上です！取扱説明書を100Pほどかいておいたので、後でよく読んでおくように！」

「うつへえ…まあ仕方ないか。

ていうかエジソン」

「?なんだ」

「時たまテレフォンショッピングみたいになつてたけどなんで？」

「…?宣伝も的確なプレゼンも商品の売り込みには必要なことだろう。伝記にもちゃんと書いてあるはずだ。…?かいてあるよね?」

「うーんこの社畜根性が染み付いてる感じ……」

「そしたら！私の説明に入つていいかな！！」

「正直お腹いっぱいだけどどうぞ!!」

アメリカン車イスに座つたままダヴィンチちゃんを見ると、いつの間にか眼鏡を装着していた。

「……なんで眼鏡？」

「雰囲気に欲しいでしょ？」

「……んーーつつこみたいけど話が進まないからどうぞ」

「ありがとう！」

さて！と、ダヴィンチちゃんが持ち上げたのは例の枯れ枝のこときものだつた。

「それ一番疑問なんだけど……なにそれ

「んつふつふ、聞いて驚きたまえ、こちら種火の腕を加工した礼装になります」

「たねびのうで」

「……、あつ、マスターはご存じないですよね？サーヴァント召喚時に、本来より弱体化した状態で召喚される不具合がありましたので、それを解決するために作られた魔術生物のことです。大概に核を露出した状態で成長するのですが、その核も共に成長して、普通の生物よりも多くの……そうですね、簡単な言葉で言うなら経験値を貯めていきますので、その核を弱体化したサーヴァントに与えることで、経験値を与えることができま

す。経験値を得させて生前と同じような成長を促し、本来の状態に戻そう、という試みだったのですが、弱体化状態での召喚という不具合そのものが解決しましたので。生き残りは一括してカルデアの隅で管理されていましたが…」

「まあ百聞は一見にしかずってやつだ。さあ、とりあえず体験したまえ」

マシユの説明にとりあえず頷いた。ダウインチちゃんがずんずんと近づいてきて、差し出された腕を嫌々ながらとりあえず受けとる。

と、

「うおわあああ!!!???

「するり、と。痛みこそなかつたものの、非常にグロい感じでその腕が自分の腕に入り込んできた。ぼこぼこと蠢く皮膚が気持ち悪く、手をひたすらまさぐられているような不快感が強い。」

「マスター!? ダヴィンチちゃん、これは…!」

「大丈夫大丈夫、痛みはないから。それで正解」

「体に干渉するものはなんであれ事前警告が必要だと思います!!!：マスター、大丈夫ですか!?」

「視覚的にめちゃくちゃ気持ち悪い……あつおさまつた。おい、これ大丈夫なんだろうな？」

「人体には無害だよ、安心してくれたまえ。さて、たぶんそろそろ出てくる頃だと思うけど……」

今しがた干からびた腕が入り込んだということ以外、ぱつと見た感じは特に異常はないよう見える。手の甲側を見ながら何度か手を握つたり閉じたりし、その次はひっくり返して手のひら側を見ながら手を握つたり閉じたり。動かすことにも何も異常はない。

「ダヴィンチちゃん？ 出てくるって何が？」

もう一度手の甲側が見えるように手のひらをひっくり返した時、それはいた。

「チュミミイーン」

「うつわ？」

独特の鳴き声に反射的に振り払うように手を動かすも、離れる様子はなかつた。手の甲にピンク色の形容しがたい生物がくつづいている。ぶんぶんとひたすら手をふるも離れない。

「なんだこれ！ なんだお前!!!」

「マツ、マスター心なしかその生き物？ 涙目です!! その辺に！」  
「ふつふくん!! やっぱいい感じに出てきたね！」

「ダヴィンチちゃん!! なんだこれ!!!」

「そちら、経験値を元に成長する魔術礼装になります！」

「……魔術礼装？」

手を降るのをやめてそいつをじっくり見る。ピンクで星柄、垂れた耳に小さな手とつぶらな瞳。口に当たる部分は尖っていて、嘴のようだつた。足に当たる部分は見当たらず、手を降るのをやめたので落ち着いたのか、それはふわりと手の側に浮かんだ。

「種火の腕の特性がちょうどよかつたので元にしてみたんだけど、腕に作用させたい礼装だつたからそつちの面でもドンピシャでね。それを視覚化させたのは私の趣味だけど、セラピー効果的なものと成長が一目でわかるように一工夫加えてみました」「手伝つてる最中疑問だつたんだがね、その外見はその、セラピー効果あるのか…？」  
「えつめつちやかわいいじyan」

「あるんだー……そつかー……」

感性がよくわからん、と遠い目をしているエジソンを無視して、その頭をうりうり撫でてやる。気持ち良さそうに目を細めていて、キモカワイイって感じだが、気に入つた。

「ちゃんと自我もあるよ。

これ、礼装だからね、持ち運ぶものにしたかつたんだけど、持ち物は極力減らしたいだろう？というわけで、腕に寄生できるようにしました！その子は君とともに成長す

る。可愛がつてやつてくれたまえ」

「ありがとう。……で、えーっと、何が出来る礼装なの?」

「ふつふつふつふーん!! そしたら! こちら!!」

どん、とダヴィンチちゃんが取り出したのはマトだった。銃とかの訓練に使うようなマト。

「腕に魔力を回して。指先に集める。それで……、そう、それでいい。それをマトに向けて、はい! 放つて!」

ドン! と心地いい音がして、マトのど真ん中に穴が開いた。マトの向こう側の壁も穴が開いている気がするけどたぶん気のせいだろう。

チュミミイーンと鳴きながらピンクの生物が機嫌よく腕の回りを飛び回っている。

「…………今は、」

「 Gandの補助礼装さ。」

……ほら、君、レフに対して気前のいいやつをぶちかましていただろう? 魔術回路が隆起していたにしても、魔術も学んでいなかつた一般人の君が、人を指差して呪いを放つた。それは原始のものだけれど、君の魔術の第一歩も、この戦いの狼煙も Gandだつたんだ。なら、主武装にするに相応しいと思ってね

「…………えーっと、ダヴィンチちゃん? Gandとは、人を指差して病氣にするとか、その程

度の呪いだつたのでは……」

「いやいやガンドだからってなめたらいけないよ？ 実際突き詰めた魔術師はガンドでコンクリートに穴を開けるって話も聞くし」

指先に魔力を集めると、ちょうど爪の上の辺りに渦巻いて出現する。それを、マトに向けて放つ。その繰り返し。

何度も繰り返し放つと、ピンクの生物はやはり機嫌が良さそうに手首の上でごろごろしている。

「…………うん、気に入った」

「加えてさつきもいつたけど、そいつは君と一緒に成長する。今はコンクリートに穴を開ける程度だけど、成長によつてはもつと思ひもよらない効果も付与してくれるようになるんじやないかな。

その子一匹作るのに腕たくさんとカルデア戦闘服のガンド機構とかも何枚かから引っこ抜いて移植したけどまあ必要経費だよね」

「…………」

全ての指先に魔力の渦を浮かべて順番に放つ。機動力がないのでどうしたつて後方支援に回らざるを得ないが、遠距離攻撃手段を持ち合わせていなかつた。それが解決する感じの魔術礼装だつた。

「……どうやら相当気に入ってくれたみたいだね」

「ああ。……本当にありがとう」

「よかつたら君が名付けるといいと思つてね、その子の名前はまだつけていないんだ。  
……思い浮かぶものはあるかい？」

「ああ」

頷いてピンク色の生物をつまみ上げる。見た瞬間から、もし名付けるとしたらこうだ  
ろうな、という名前を閃いていた。

「『タスク牙』と呼ぶ。どうかこいつと僕が、怨敵の喉を食い破れますように」

「そうかい。……そうか、いい名前だね」

『タスク牙』はやはり嬉しそうに、チュミミイーン、と鳴いていた。

戦場は明日。これからこいつになれる必要がある。忙しくなりそうだつた。

# 草原で語る

「…………あれ？もう演奏は終わつたけど、なんでいるの？余韻を楽しむのは結構だけど、僕の邪魔をしないでくれよ」

「…………お願ひが、あります」

「なんだい？僕は僕の音楽活動を邪魔しないでくれつて最初に言つたよね？それ以外は好きにしてくれていいつて聖杯だつてあげたのに。なのになんで僕にまだことがあるの？」

「……あなたの音楽はなんですか！？私のジャンヌだけではない、ジャンヌの召喚したサーヴァントまで、あなたの音楽を聞きにくる！！」

「特に特別なことはしてないよ？僕は曲をつくつて演奏してるだけだろ。それを勝手に聞きに来て、勝手に依存して、勝手に聞かなければ靈基が保てなくなつたのは君たちじやないか。そんなの僕は知らないよ」

「我々の命を握つておいて、なんという言い草か！！」

「うるつさいなあもう、知らないもんは知らないよ。出てつてくれよ、なんなら僕は演奏

せずに作曲だけしててもいいんだぜ」

「…………つ、この…………失礼します!!」

「…………まあ、作曲するってつたつて弾きながらしたりもするんだけどね?」

「しかしまあ、悪魔的な音楽、なんて言われもしたけど、実際に悪魔になつてみるとこんなもんか。曲の出来はあんまり変わんないや」

「演奏は…………変わってるのかなあ、変わってる気は全然しないんだけど、あんなこと言われたつてことは変わってるんだろうなあ」

「まあ、いつか。曲を作ろう。この体は今度は途中で死んだりしないもんな」



「……なにか、とてつもない悪夢を見ていたような……」

「あつ起きた。おはようサンソン、残念ながら夢じやないよ」

「?」

飛び起きようとして、自分が直立不動で突つ立つていてことに気づいた。

辺りを見回すと、草原のような場所だつた。レイシフト直後の場所に似ていたが、そうではないようで、離れたところに街の城壁が見える。そして、相変わらず地面に座っているジヨニイと、その前に立つマシユ、そしてサリエリとマリーがいるのが見えた。  
…………遠くに。

「……？ 状況がよく飲み込めないんだが……」

「君をつれてくるのは大変だつたんだ、足を負傷させたとはいえ放送禁止用語スピーカーの横で正気を失つてるもんだから、マシユに担いできてもらつたんだよ。具体的に言うと盾に二人乗つけて盾を担いでもらつたんだけどね？ 成人男性二人を担がせてしまつた時点でぼくも色んな意味で死にそうになつたけど」

「その、マスターはこう言つてますが、案外なんとかなりましたのでお気になさらず：！」

「…………あー…………その、それは、悪かつたよ」

「で、その、だな？あのやつベえサンソンがいたじやん？」

「あれは僕じやない…………」

「いや気持ちはわかる。スッゲーわかる。ぼくにだつて人に言いたくない性癖くらいあるさ」

「…………」

「こちらの二人に話を聞いたんだが、敵方のサーヴァント、全員狂化した状態で召喚されて、従わされるらしくてな？」

「……？、！、ああ、」

「まあ狂化されてるってことは普通じやないんだろうけど、ほら、狂気の種？みたいなのはあると思うんだ」

「……おい？ ジョニイ？」

「正気に戻つたとこで大つ……変申し訳ないんだが、ぶつちやけ君あのサンソンの言つてることとちよつと共感しちゃつたりとかしなかつた？ 具体的に言うと、ほんとはそう思つてるとこもあるけどまあ言うことじやないしいつかみみたいな感じで性癖を隠しているとか。あつマシユは耳塞いでて」

「えつ」

笑顔でマリーがマシユの耳を塞いで、マリーの耳はサリエリが塞いだ。

「ほら、これで男衆にしか聞こえないから。言つていいよ？ 例えばこう、マリー・アントワネットには欲情しかけたことがあるとかで m 「そんなことあるわけないだろ!!」

…………そつかー…………

食い気味の返答に若干ひき気味のジョニーである。

「なんでひくんだよ！僕はあんなこと思つてないし!!!あれは!!!僕じやない!!!!!!」

「ほんとに？」

「ほんとに!!!」

「マシユとか女性職員のうなじとかに欲情してたりしない？」

「してない!!!」

「…………ほんとに？」

「ほんとに!!!いい加減怒るぞ!!」

「もう怒つてるじyan…………悪かつたよ、一応あの、なんていうか、我慢させてるとか  
だつたら聞かなきやなつていうのと、安全確認をね」

「…………やらなきやいけなかつたん

だらうなつていうのはわかつたけど、後でちょっとお話があります」

「ごめんつて」

思いつきりため息をついて四人の元に歩み寄る。フランスにきてからため息をつい  
てばかりな気がして、またため息が出そうになつた。

「それで？正氣を失つてたのは申し訳なかつた。情報を僕にももらつていいかい？」

『いやー、正直あれはしようがないって。あれと同じようなことが起きたら僕もすぐに受け入れられる気はしないもん』

「ドクターも聞いてたんですか…………うつわ」

『嫌そうな顔しないでくれよ!! 僕だつて傷つくんだぞう!!』

茶番を済ませて、頭を切り替える。

「それで?」

『説明は僕からでもいいかい? 一応話途中だつたし、補足があればお願ひします』

「はーい、大丈夫よ」

「よろしく」

『まず、基本的なところからいこうか。時代は1431年のフランス、百年戦争が行われていた辺りだね。細かいところをいうと、ジャンヌ・ダルクが処刑されてから二週間くらい経過しているんだけど…。お二人の証言によると、ジャンヌ・ダルクが復活したらしい』

「……復活?」

ジャンヌ・ダルクは聖人ではあるが、復活の逸話はなかつたはずだつた。

そうよ、とマリーが頷いた。

「さつき遭遇してたから間違いないわ。サーヴァントだつたわよ、悪い表情に黒い装束で、綺麗なお顔なのにもつたといないって思つたの」

「…………そこまでは聞いてなかつたぞ、ちゃんと距離とれてる？ロマン？」

『大丈夫、今のところ僕らが調査できる範囲にサーヴァントの反応はないよ』

「お城に帰るつていつてたし、それでもやつぱり私たちを追いかけるつてあのサンソンが残つて追いかけてきたのだもの。あのサンソンをふりきれたのなら大丈夫よ！」  
ジョニイの顔が、さつきふりきてなかつたからああなつたんだよなあ、と言わんばかりの顔をしていた。マシユもちよつと遠い目をしている。

『ええと、話を続けるね？そのジャンヌ・ダルクは、ワイバーン等の竜種、それから狂化したサーヴァントを率いてフランスを荒らし回つてゐるらしい。巨大な竜の目撃談もあるそうだから、もしかしたらその竜をどうにかして操ることで、ワイバーンなんかを産ませて使役しているのかも知れないね』

「…………つまり、ジャンヌ・ダルクが？あの僕であつて僕じやないあれを？召喚したかも知れないと？」

「キレてる？」

「キレイですね……あれは怒つていいと思ひますけど」

「だから聞こえてるつて！」

マスターとマシユのひそひそ話に怒鳴つて、もう、とまたため息をつく。ため息の回数を数えるべきだろうか。

「……それで？」

『もう間違いようもないから、敵と呼称してしまって。敵はオルレアンに陣取つてゐる。最初の頃は昼夜問わず暴れまわつていたようだけど、ここ一週間は夕方にはオルレアンに帰城しているらしい』

領いて、サリエリが口を開いた。

「…………そのお陰で戦線は現在小康状態だ。生き残つたフランス人はあちこちで集結しだしてゐる。最も、代わりに夜は魔獸が活発化するようになつたが」

「魔獸ね……、まあ、別に宝具使うわけじゃないんだろ？ それなら夜に接近して、何か仕掛けるなら昼つて感じかな」

「そうなるだろうな」

「…………なんだか、落ち着いていらつしやいますね？」

サリエリの発言にマシユが首をかしげた。確かに、遭遇時よりは落ち着いた様子を見せてゐる。落ち着いた、というよりは理性的、というか、喋る言葉が理路整然としている、と言うべきか。

「……我がクラスは復讐者だ。アヴェンジャーアヴェンジャーアマデウスを殺す灰色の男であり、我はサリエリではな

い。……だが、戦闘もなく、マリーの側なら多少は私としての側面も強く出る。それでなくとも、今回の境界は落ち着いているというか、……あー、理性的、だと思う

「それで理性的なのか？」

「やはり貴様は殺すか？」

「はい、そこまで！」

途端にメンチを切りあいはじめた二人の間に慌ててマリーが入る。

要するに、アントニオ・サリエリと伝承の『灰色の男』の融合した英靈であつて、本人としては『灰色の男』としての自意識が強いのだろうが、サリエリでも勿論あるから、特に自己紹介のようなものをするとき混乱してしまうのだろう。灰色の男とサリエリが混在している。

『やけにサンソンくん苛立つてるよね…………ってあんなことがあつた後じや当たり前か』

「サンソンより意味のわからないものはないとかぬかされたのが、あれと遭遇した後だと意味がわかつてしまつて腹が立ちますね!!」

「八つ当たりか無様だな」

「は？」

「もう!!サリエリ、サンソンもそこまでにして！」

サンソンの機嫌が悪いにしろ、サリエリに突つかるのはちょっと違和感がある。サリエリ側はサリエリの普段を知らないのでなんともいえないが、たぶん元からあんまり相性がよくないのかもしれない。それかむしろ同族嫌悪か。

片やオーストリア、ローマの宮廷楽長、片やフランスの処刑執行人である。見知った程度のようだが、どうしてお互いを見る機会があつたのだろうか。サンソンがフランスを離れることはなかつたろうから、たぶんコンサートか何かでサリエリの方がフランスに行つたことがあつたのだろう。もしくは、英靈になつてから遭遇した記録が座でも残つていたか。

やれやれ、とジョニイは会話を戻す。

「さて、そうしたら今後はどうしたもんかな…。仲間になつてくれそうなサーヴアントとかも、あんたたち以外に召喚されてるといいんだけど。野良サーヴアント、なんだよな？」

「ええ、私もアントニオもマスターのいないはぐれよ」

「他にもはぐれがいるなら協力頼めるといいんだが……キヤスターとか召喚されてないかなあ……。戦力的には竜を倒したことある英靈とか、聖人殺しの英靈とかがいればほしいけど……キヤスターいないかなあ……」

「キヤスター?……ごめんなさい、見たことがないわ。ランサーとバーサーカーは見た

のだけど……」

「絶対に近寄りたくない」

サリエリがマリーの言葉を遮る。

やけに強い口調に四人全員の視線がサリエリに集まつた。

もう一度サリエリはいう。

「絶対に近寄りたくない。あの冒涜的な音痴に飽きもせず繰り返すキャットファイト、仮に指導を命じられたとして金を払つてでもお断り申し上げる。絶対に近寄りたくない」

「ええと、ごめんなさいね、サリエリがこんな感じだから、接触はしなかつたの」

「えええ…………」

「あれに交渉しにいくなら私は絶対に協力しない。絶対に近寄りたくない」

ひたすら死んだ目で絶対に近寄りたくないと繰り返すサリエリにむしろ興味が沸いたのだが。

「鼓膜が吹っ飛んで脳みそも垂れ流したいなら一人でいつてくるといい。私は絶対に近寄りたくない」

とのサリエリの言葉に断念することにした。さすがに死にたくはない。

「…………私はお友だちになれると思ったのだけどね」

「いくらマリーでも駄目だ」

「そんなにかー……。うーん、そうしたらあれだな、他のサーヴァント探しは一旦保留にして、靈脈に行きたい」

「靈脈？」

「カルデアからの物資を受けとりたいんだ。いつまでも担がれたままっていうのもね」

「それはどこにあるの？」

『君たちから見てちょうど街のようなものが見える方角だね、街を通りすぎた先の森の中だ』

「…………そう」

「聞いた通りの戦況なら担がれてても違和感ないかな？」

「いいえ。…………いいえ」

マリーが泣きそうな顔で首を振る。

「あの街、もう滅びてるの。二～三日前までは上空をワイバーンが旋回していたりしたのだけど、それも無くなつてることは、」

「…………もう、生きてるものはいない、つてことか」

冬木でジョニーは死線をさ迷った。

心臓こそ止まらなかつたものの、心臓が止まらなかつただけで、死んだも同然の状態だつたのだ。

いくらカルデアの設備が世界的に見て高水準だつたとしても、回復にはそれなりの時間がかかつたし、そも、カルデアの設備そのものも爆破の影響で万全ではなかつた。まず意識が戻るまでに時間がかかつたし、上体を起こせるようになるまでもそれなりにかかつたのである。

本来ならば、第一特異点が発見された時点での急行できたところを、ジョニイのリハビリ等の時間を割いたために、発見から二週間と少しでやつとレイシフト出来たのだ。本当はもう少し時間をかけなくてはならないのに、とは医師としてのロマンの言葉で、それでもごめんよ、今君を送り出さないと取り返しがつかなくなる、とは所長代理としてのロマンの言葉だつた。

もしも、爆破に巻き込まれなかつたのなら、あの街は滅びずすんだのだろうか。  
そんなことを、ジョニイは思う。

あの街の滅びは、あの時もしも誰かが革命に動き出さなかつたら、とかそういうレベルではなく、最早人がどれだけ生存しているのか、というレベルまで崩壊が進んでいる、その証なのだろう。

人を救わなくて、どうして人理が救えるのか。

元凶をぶち殺すのはもちろんとして、人理を救い、世界を取り戻さなければ、ジョニイの家族は戻つてこないのだ。

「…………移動しよう、一応街も見ておきたいから、街の中を突つ切る」

# アーチャーだから弓持つてる

街中を馬に揺られて歩く。

どうしたって、牧場のあいつと比べて、そんなでもないなあ、と思つてしまふのだけど。

稀有な馬だった。街が襲われ滅び、尚もひたすら焼かれ、ワイバーンにもゾンビにも骸骨にも追われたであろうに、いくらかの傷だけで生き延びている。散々色んなものを見て、きっと狂うほど怖かつたろうに、心も体もちゃんと生きていて、人間に駆け寄つてきた、本当に稀有で強い馬。

そんな馬を捕まえてジョニイが乗りたいといったとき、最初はサンソンが後ろに乗るといつたのを断つて一人で乗つてみたら、案外、なんとかなつたので、そのまま行軍している。

『いやはや……スツゴいなジョニイくん、あのね、君の麻痺の具合だと、普通馬に乗るなんて無理だぞ…?』

「……まあ、昔ね、あぶみ無しで手綱だけで馬を操る練習をしたことがあるんだ。今みた

いな座りかたをしてさ」

俗に言うペタンコ座りとか、お姉さん座りとか、そういう感じで馬に乗るのだ。昔やつたことがあつたつけと思わず悩んだくらいにその乗り方に違和感がなく、特に普段と遜色なく操れたときの驚きを覚えている。

マリーが口を挟んでくる。

「昔聞いたことがあるの、馬って、本当は全身で乗るものなんでしょう？普通に見ていると手綱とかムチだけで操っているように見えるから、それを聞いたときはびっくりしたわ」

「まあ……慣れてる騎手なら膝だけで馬を操つたりもできるだろうさ。馬にこう動いてくれつてお願ひする手段は一つじやないからね。ていうか、そういう技術がなきや乗馬戦でチャンバラなんて無理無理」

「それもそうね、片手か両手を開けなくつちや槍は握れないもの。それにしたつて綺麗に乗るのね」

ジヨニイは肩をすくめた。

「これでも馬乗りで食つてたんだ、それくらいはね」

「馬乗り、ですか」

マシュが首をかしげるのに苦笑した。

「まあ、レースとかだよ。色々あるんだけど、とりあえず片つ端から出てた。これでも優勝常連だつたんだぜ？実入りはいいんだけど、出費も激しいからとんとんだつたんだよなあ……。馬を牧場に預けておくだけだつてお金がかかるし。……マシユも乗つてみたい？」

マシユの目が目に見えて輝いた。

「はい！……あつ、えつと、今はこんな状況ですからマスターの護衛に専念しますけど、でも、いつか乗つてみたいですよ！」

「そしたら教えてあげるよ。これから昔の時代に遡つていくなら、乗る機会もあるだろうし」

「！はい、はい！楽しみです！」

よっぽど嬉しいのか、足取りも軽くなつたように見える。女の子がはしゃぐのを見るのは悪い気分ではない。弟の承太郎なんかは小学生だと言うのに取り巻きがいるのだが、そのかしましさに我慢ができずにうつとうしいとぼやいているのを聞いたりもするけれど。

ふと、思い立つて口にする。

「そういえば、お姫様に騎乗させてあげられなくて悪い。ぼく一人ならまだしも、誰かをのせてまでちゃんと御せるかはちょっと不安だ」

「いいえ、あなたが乗るべきだと思うわ。心遣いをありがとう。それに、あなたに乗つてもらつて馬も嬉しそうだもの、ランデヴーを邪魔するのも悪いわ」

「そう？」

たぶん、この馬は生き延びたら生き延びたで寂しかつたのだろうなあ、と思う。その寂しいところに人間がきたから飛び付いてきただけだ。

そもそも街に残つていることがおかしくすらあつた。ぷつりきれた繋ぎ縄と、かけられた馬具はそのままだつたけれど、その気になれば草原でも森でもどこにでもいけばよかつたのに。

人と長く居すぎて、人の痕跡から離れられなくなつたのだろう。

元々人懐こい馬として可愛がられていたのではないかと思いつつ、馬上から、襲いかかつてきたゾンビに『牙』<sup>(タスク)</sup>を放つ。続けてサンソンがその首を断ち、後ろからやつて来たゾンビはサリエリが片腕だけ慟哭外装をまとつて倒す。

その後も誰かいなかをロマンに索敵してもらいながら街道を進んだ。どれだけ歩いても生きた気配は動物程度、本当に街は滅びきつていて、最早燃えるものもなく、たまに熾火が燃つてている程度だつた。死体は食い散らかされるかゾンビとして徘徊していく面影すらない。

もし奇跡的に生き残りがいたら、とか、何か情報があれば、とか、……滅びた街で

あつても、それを直に見てみたかつた、とか。色々あつて、街の中を通ることを選んだけれど。

死に絶えた街である、ということを理解するばかりで、……ああ、と思う。  
もう、十分だつた。

「…………早いところ街を出よう」



森の中でやつと靈脈にたどり着いた。群がつていた元街人らしきものと、魔獣のよう  
なものを蹴散らして、サークルを設置する。

馬は馬具を全部外して放してやつた。名残惜しそうにしばらく近くをうろうろして  
いたが、やがて森の中に消えていった。

物資はもちろん、車椅子も手に入つて、色にぎよつとしたマリーとサリエリを笑つてやる。開き直りが大事だ。これ、街の中だと目立つんじやないかなあとと思うのだが、その辺エジソンとダヴィンチちゃんは対策してくれてあるのだろうか。

『…………してないんじやないかなあ』

「そつかー…………」

ロマンの声が完全に諦めきつていた。

全身が沈みこむような感覚とか、手のひらで撫でただけでもわかるクツショーン性能の高さとか、本当にいものを作つてくれたのだとわかるのだが、やつぱり色がどうしようもない。赤と白のストライプだけでも頭おかしいのに、よくもまあこの複雑な形に星柄をかき込んだものだ。

一旦落ち着いたところで、さて、と今後の方針を話し合う。

「とりあえず、目標をジャンヌ・ダルクの撃破にしてみようか。サンソンも屈辱を晴らしたいだろうし、一番分かりやすい」

『まあ、そうだね。レフが出てこなければ、冬木の異変はアーサー王を倒して聖杯が無くなつたことで収まつていたことになる。冬木におけるアーサー王が、オルoleanにおけるジャンヌ・ダルクと考えてもいいだろう。異変を積極的に起こしているサーヴアントを倒す』、『聖杯を回収する』、この二点を目標にしてほしい』

「了解しました。……とすると、今後はオルレアンに向かうことに？」

「向かいついでの道中でサーヴァントの捜索をしたいな。街とかに潜伏するなりしてもかまわぬがいいけれど」

「後は聞き込みも必要でしょう。どんなサーヴァントが敵方にいるか、だとか、片鱗だけでもかき集めたいですね」

サンソンは大分落ち着いたのか、マリーの目の前だということで敬語を喋っている。

マリーがはい、と拳手をした。

「えーっと、サンソンはもちろんなんだけれど、シユヴァリエ・デオンとジル・ド・レエも追加しておいて下さいな。デオンはジャンヌと遭遇したときにして、ジル・ド・レエの名前ははつきりジャンヌが口に出していたわ」

「他には誰かいた？」

「後は、そうね、仮面を被つた男の人と、全身鎧の人がいたかしら」

「それだけでも六人か、結構いるね」

そう言つた瞬間、ジョニイは車椅子から吹っ飛んだ。前面の木に思いつき叩きつけられて、がばつと無様に息を吐く。地面に落ちて、そこでようやく痛みが襲ってきた。霞んだ視界に、車椅子の側に転がつた矢のようなものが目にはいる。

痛みがじわじわと広がり、ちょうど心臓のある辺りを、背中側から射ぬかれたのだと

理解する。車椅子の背もたれが守つてくれたのだろう、丈夫に車椅子を作つていてくれたことに心から感謝した。

「……マスター!!」

叫んだマシユがジョニイを庇つて盾を構え、その回りにサーヴァント三人が立つ。サンソンが叫んだ。

「無事か、ジョニイ！」

『ツゲホツ、ゴホツ、なんとか……！心臓を狙つてくれて助かつた、でなきや死んでた！』

マスター狙いの遠距離射撃、完全に意識外からの一射だつた。下手をすればこの瞬間に人理修復の道のりは途絶えていた。その事実にサンソンとマシユが戦慄する。

「ドクター！索敵を！」

『もうやつてるしづつとやつてたよ！けどどこにもいないんだ！』

『…………つてことは、気配遮断か、…………いや、範囲外にいるのか。矢が消えてくのが見えた、たぶんアーチャーだ！』

どうすればいいのだ、と頭を回す。

“牙”

で遠距離狙撃？無理だ、精々 5 m 程度しか

飛ばない。そもそも敵が視認できていない。サリエリの“音”が届くかどうかとも怪しいし、届いたところで仕留めきれなければ逃げられる。エジソンを召喚する？いや、エジソンのビーム砲（初めて見たときに爆笑した）だつてそんなに距離を稼げるわけじや

ない。

今ばかりは射程距離の長い広域殲滅が可能な攻撃が欲しかった。

「せめて近づいてきてくれればいいのに……わざわざ心臓を狙ってきたつてことはたぶん目視して射つてきてるんだろうけど!!どんな目と腕してんだよ!!」

「流石はアーチャーというべきなのでしようが、それをされ続けるとこちらには打つ手がありません……！」

「遠距離で大量に打ち込んでこられたりなんかしたら最悪だぞ、かといってここから動くのも、」

「…………呼び寄せればいいのよね？」

マリーがそう言つて、震える腕を胸の前で組んで、一人離れたところへ進み出る。狙撃の恐怖に震える姿は、何故か人の目を引き寄せた。

「待つて、マリー……！」

サンソンが思わずといつたように手を伸ばす。

「ええ、ダメよ、ダメ、こんなに震えてちや、どんな方だつて逃げてしまうわ。だから、

——咲き誇れ、私。キラキラ、キラキラ、輝くの！」

その瞬間、スキルが発動される。

『麗しの姫君』ランクA。

それは周囲の人々を惹き付け、彼女を守る騎士を呼ぶ力。つまりは、それほどまでに魅力的。

『魅惑の美声』ランクC。

これもまた、人を惹き付ける魅力の力。マリーのそれは、王権による力の行使すら宣言するものである。異性にしか効果のないそれではあるが、麗しの姫君との併用で威力をあげる。

「私はここよ、さあ、いらっしゃいな！」

その澄んだ声は森の中にどこまでも響き渡った。



一撃で仕留めるつもりだった。サーヴァントの盾が絶妙にマスターの頭に被さつていて、他に狙うところが胴体しかなかつたので、心臓を射ぬくつもりで弓を引き絞つた。

薄つぺらい奇妙な形の椅子だ、容易く射ぬける自信はあつたが、念には念をいれて、射の精度が落ちないギリギリまで弓をひいて、ひいて、射つた。

だのにマスターは生きていて、しかも策を巡らせようとしている。

一撃を外した時点で一度離脱し、少し時間をおいてまた放つ、それを繰り返そうとしていたが、女のサーヴァントが一人歩み出たのを見て考えを変え――、それが、いけなかつた。

過ちによつて得た獣の性質により、そのサーヴァントの耳はとてもよく、目だつてもよかつた。だから、その可憐な姫の姿も、誘う声も、とてもとても離れていたにもかかわらず、全て受け取つてしまつた。

元よりあつたはずの理性は狂化によりどうになく。また、獅子としての名残がその衝動を加速させた。

あれは、姫だ。愛でられ続けたお姫様。自分が辿らなかつた道の末の完成形のようなもの。そんなものがなぜこんなところに。決まつてゐる、生け贋だ。アンドロメダもうだつたではないか。ああ、その喉元に食らいつきたい。弓もいいが、そんなものより、直接あの白い喉仏に食らいついて、むしやぶつて、滴るもの飲み干して、それで――

あれ、前にも、こんなことが、あつたような、

気づいたときにはそのお姫様の目の前に、大口を開けて飛び込んでいた。

『きた！』

「…つ、早、サリエリ！」

マスターが叫ぶ。

「静肅にしろ、獣め！ 最期の時を速やかに受け入れろ!!」

その瞬間、音がそのサーヴァント——アタランテをぶん殴つた。発達した聴覚とともに脳を揺らし、ぐらついたところをどこからか生えてきた黒い腕が絡めとる。

「死は明日への希望なり！」

最後に何故か見えたのは、下半身不随のマスターの殺意に満ちた目だつた。

そうなつても尚、世界を救うと意思燃やすのなら。きっと、貴様は駆け続けるのだろう。

断頭台の刃が速やかに落ち、どこか安堵したような表情で、サーヴァントは消失した。

□

「あつ……！」

「マシユ？」

「どうした？」

「…………あの、マスター、車椅子が……」

戦闘終了後、ジョニイの手当てをしてているときに、周囲の警戒をしていたマシユが車椅子を押してきた。

その背もたれは見事に陥没していて、とてもではないが快適に座ることは不可能だった。しかも、当たりどころが悪かつたのか、電動で動く仕組みが壊れているらしく、手動で動かす他なさそうだ。

「十回は敵の攻撃を防げるつていったじやん……」

『何!? もう壊れた!? スーパーエジソン号は30分前に見送ったのではなかつたかね!? えつ私の努力30分で消えた!??』

『車椅子送るここまで結局見てたんじゃないですかもー！ 今もいるし！』

『エジソン号〜〜!!!』

通信の向こうが一気に騒がしくなる。

「いや、守つてくれたからいいんだけどね……？ 色々壊れてるっぽいけど頑なにちよつと浮いてるし」

「お手洗いの機能は……あつこれも無事ですね一応」

「そうしたら手動で動かしてけばいつか…………うーん、こうなるとさつきの馬逃がさな  
くてもよかつたかもな」

「いや、たぶん戦闘に巻き込まれて死亡するだろうから、逃がして正解だろう」

「そう？」

治療を一旦中断して、車椅子の調子を確かめる。自動走行と座った上で快適性が失  
われたようであつたが、一応乗れないことはなかつた。

『N○＼!!いく!!!私もそつちいく!!!エジソン号直す!!』

『使えなくはなさそだから!!!ね!?襲撃されたばつかだから移動させたげて!?それにそ  
れより通信直して!今ちよつと不安定だから!!!途切れさせたくないからちよつあつ  
まつザザザザザザザザザザザザザザ』

「…………つれてきた方がよかつたかなあ……」

「ぶつちやけいたところで今回のがどうにかなつたかつていうと微妙なとこだけれど」

「に、しても、何でここまで壊れてしまつたんでしよう?」

震えていたマリーを落ち着かせていたサリエリが、三人を一瞥してため息をついた。  
「…………十回攻撃されても壊れない車椅子、だつたか。それがほんとに車椅子なのかどう  
かはしらんが」

「ぼくらもちよつと怪しんでるから自立移動式便所つて呼ばうか迷つてたよ」

「…………」

なんとも言えない顔をしたサリエリがひよい、と指先を持ち上げる。どこからともなく演奏隊が現れて、周囲を巡り始めた。同時にリラックスさせるような音楽も流れ始める。

「通信が繋がらなくなつたのなら、とりあえず周囲の索敵はこいつらに任せる」

「あつ、うん」

話をそらされたなあ、と半眼でサリエリを見ると、サリエリは肩をすくめた。

「…………つまりは、十回分に相当する攻撃を受けたのだろうよ」

「…………あー、そういうこと」

「もう少し気を引き締めたまえ。さもなければ我が貴様を殺してやるぞ」

「叱咤をどうも。それならあんたは人理の敵だけだな」

しばらく睨みあつた後、身支度を整え、再び移動を開始した。

# 街を歩く

移動中のことである。

街道を堂々と通るのも危なつかしく思えたため、道なき道をひたすら進んでいた時のことだつた。

「あの、ジョニィ？」

「…? 何?」

マリーがちよいちよい、と手招きをするので、少し車椅子を動かすスピードを落とした。

「なんだよ」

「あの、マシユなんだけれど」

「マシユ?」

小声でやり取りして、ちらりとその背中を見る。特に変化はないように見えた。正面から何かがきたときはその守りを発揮してくれるだろう。

「マシユがどうかした?」

「たぶんだけれど、ちょっと落ち込んでいるように見えるの。マスターさん、様子を見てあげたらどうかしら」

「…………あー、そう？ 全然気づかなかつたな…」

「これから、あなたはたくさん戦つて、そうして、もしかしたらたくさんの仲間を得るのでしょうか？ サーヴァントの様子を見たり、関係に気を配るのも大事だと思うわ。特にマシユは生きているのだもの、気にかけてあげて」

「…………うん、ありがとう」

「どういたしまして！」

「マリーと何を話している、ジョースター」

会話にサリエリが割り込んできて、さすがに前を歩いていたマシユとサンソンも振り返った。

「いや、ぼくが疲れてるよう見えるから、休憩しなくて大丈夫かつて言われてね。そろそろ夕暮れだし、お腹すいてきたし、どこかで拠点作るのもいいかも」

「…………すいませんマスター！ 手当をしたとはいえ、お怪我をさせていたのに！ 気が回らズ…………」

「ああ、いいつて、ぼくも疲れてるって感じはなかつたからさ。マシユは大丈夫？」

「はい、大丈夫、です…」

会話をしてみて確かに、と思う。気落ちしているというか、なんというか。

話ををしてみようとは思うものの、女遊びはそれなりにしているし、妹もいる身ではあるが、マシユのようなタイプのメンタルとなるとちょっとよくわからない。ジョリーンは落ち込むどころか、ちょっと嫌なこと言われてへこんだからやり返ってきてやつたわ！と武勇伝を語つてくるし。大変たくましくお育ちになった彼女は、最近ストーカーが出来たことを告白してきたつけるなあと思いつ出して少し遠い目をした。一年くらい前からストーカーされてるけどまあ慣れたし気のいい友達みたいなもんよ、と言わられて定助と二人で頭を抱えたものである。ストーカーができた時点で相談しろよ。

尚、聞き付けた小学生承太郎がそのストーカーにバトルを挑んではぶちのめしているようで、とりあえずはいいか、と今のところは放置していたのだつけ。

まあ、要するに、大体真逆の女の子しか知らないのだ。

「拠点にできそなところを探そう、ご飯と仮眠をとりたい」

「仮眠？」

「夜の間に進んどいた方がいいだろ。ご飯食べて、少し寝たら出発にしよう」

「了解しました」

行軍しながらちょうどいい木立を見つけ、そこに拠点を設置する。さすがに火を炊く氣にはならなかつたので、携行していた食料をそもそも食べる。サーヴァント達は食

事を口にせず、三人とも警戒の姿勢に入ったので、必然的にマシユと二人の食事となつた。もう少し余裕ができたらサーヴアントとも食事ができるのだろうけども。

「マシユ」

「はい」

「…………あー、ぼくあんまり口がうまくないからそのまま聞くけど、どうした？ 落ち込んでもる？」

「えつ、」

直球で聞きすぎただろうか、びっくりして固まつたマシユに慌てる。

目線をさ迷わせると、ちよつと呆れた表情のマリーとサンソンと目があつた。それはないわ〜と言わんばかりの顔である。

目線が思いつきり助けを求めていたらしく、肩をすくめてみせたサンソンが近寄つてきて隣に座り、口を開いた。

「ええと、ジョニーはちょっと直球でものを言い過ぎだけど、どうだろう、僕も少し心配していたんだ。何か悩んでいるなら話してみる気はない？」

悩んだ様子でマシユは口に運んでいた食べ物をおろして姿勢を正した。

「お気遣いありがとうございます……、その……私、マスターをお守り出来なかつたのが

不甲斐なくて……」

「えつ？」

はて、とジョニイは首をかしげた。

「仮想敵の前で突つ立つて武器すら出さなかつた人もいるつていうのに何いつてるんだ？」

「ジョニイ!!!!…いやそのとおりだからなにもいえないんだけど……うん……」

カルデアの探知外、あの場にいる誰もが気づけない攻撃など、いわば防げない事故のようなものだ。ジョッキー、処刑人、王妃、音楽家、そして戦闘を始めたての素人。元々戦闘を生業にしていた者が誰もいないこのチームで、直感で攻撃を感じるとか、殺気を察知するとか、そういう技能がある者がいるわけがない。

それでも、そういう事故に対する備えは車椅子という形であつて、それで最悪は免れたのだし、むしろ明らかに戦闘状態に入つてゐるのに動けなかつたサンソンの方が問題だつた、とジョニイは思つていた。

そんなことをマシユに伝えると、でも、と彼女は言い募つてくる。

「私は盾です。それに、その、盾とか、鎧の装備とか、アーサー王が私に興味を持つたとか、…………たぶん、私に力をくれたのは、戦士…………いいえ、騎士のサーヴァントだと思うのです。だつたらなおのこと、お守りできなければ…………」

「戦闘行動ちやんととれてるし、今は仮とはいえ宝具も使えるんだろ？ぼくとしては

「ジョニーは生きてるよ、マシユ」

堂々巡りになりそうな話をサンソンが断ち切つて、マシユの目を見つめた。

マシユはひゅっと息をのむ。

冬木でも、一步間違えたらマスターの息は止まつていただろう。そして、今回もそうなるところだった。その、失っていたかもしれない恐怖が収まつていないとということに、サンソンは気づいていた。

「ジョニーは生きてる。冬木のように死にかけでも、今死にそうになつてゐるわけでもない。君はちゃんと役割を果たしてゐる。今回は確かに運が良かつただけだつたけれど、自分の役割を理解して反省できるのはよいことだ。でも思い詰めたらいけない。その先を考えなさい」

「その先、ですか……」

「僕も、マリーも、サリエリも死んでゐる。君に力を託したサーヴァントもね。でも、君は生きていて、先がある。成長できる。失敗の反省は充分したね？ そうしたら、次はどうしよう、と考えるのさ。前向きにね。」

「マシユ、もう少し自分を出してくれていいんだよ。感じたこと、思つたこと、なんでも僕らに話してくれたらいい。馬に乗る話の時とかみたいにね」

「……はい！」

元気に頷いたマシユに安心して食事を口に運ぶ。結局サンソンに任せきりにしてしまつたことになる。それもどうかと思ったので、口の中のものを飲み込んで、ジョニイは言つた。

「マジでいうけど、今んとこ不満だとか不足だとか感じたことはないよ。ぼくはどうしたって機動力がないから、守ってくれるマシユはぼくの生命線だ。だから、」「ジョニイー！あのね！今ちよつといい感じで終わつてたのに！なんでプレッシャーかけるような言葉を付け足すんだ!?」

「えつこれプレッシャーなの!?今までありがとうこれからもよろしくねつてだけだろす！」

「軽い言葉で言えるならそう言え！重たい言葉にするな！」

「いえ！あの！大丈夫、大丈夫ですから！……はい、こちらこそ、よろしくお願ひ致します！」

苦笑ぎみではあつたけれど、笑顔でそう言つてくれたマシユに胸を撫で下ろす。  
食事を終えて寝袋に潜り込んで、考える。

戦士のサーヴァントがいないというのも問題かも知れなかつた。カルデアのエジソンとダヴィンチちゃんも発明家と芸術家であつて、今のところどどめをサンソンの宝具

で強引に推し進めてきているから敵の撃破はなんとかなっているが、それも難しい場合完全に詰むことになる。

キヤスターのサーヴァントだつて欲しい。いや、充分比率としては足りてはいるのだが、目的に沿うサーヴァントがないのだ。解説はもちろんとして、結界だとか、そういう陣地の作成が出来れば話したりする時も狙撃を警戒しなくてもよくなるだろうし、カルデアで索敵するんじやなく、使い魔などで現地で索敵するようにすれば効率もいいだろう。

その辺発明とかでなんとかなればいいのだが、帰つたら提案してみようか。

なんにせよ人材が足りていなかつた。どう考へても召喚をすべきなのだが、石がない。一応、道中で見つけたものを拾つてきたりはしているのだけれど、それでもまだ二つしか見つかっていない。石を材料にするなどよくよく言い聞かせねばならないだろう。

ある程度対策は練つてきたものの、いざ現地に来てみれば、色々と改善点が浮かび上がる。予想外のものに対する襲撃に対しての備えが足りていない。

いくつかの案を考えながらジョニイは眠りについた。



四時間ほど眠つてから起き上がる。夜も更けた頃合いではあつたが、幸い空は晴れていて、月の明るさで辺りは充分見渡せそうだつた。

身支度を整え移動を開始する。

道中、ヴヴァン、と音がして、通信が繋がつたことを察したジョニイは通信機に目をやつた。

『…………よかつた…………やつと繋がつた…………』

「ロマン、無事？」

『なんとかね……、ねえジョニイくん、僕から頼んでおいて申し訳ないんだけど、次の特異点はエジソンを連れていくつてくれないか……。あの、大人しく整備に戻つてもらうまで大変で大変で……。それにほつとくとダヴィンチちゃんと結託して違うことやりだすから、いつそダヴィンチちゃんだけをひたすら整備班に回してた方が効率いいかも

』

「あー、うん……わかつた。あつ、送つてないから大丈夫だと思うけど、二人に石を素材にするなつて伝えておいてもらつていい？やつぱ人手が足りてないよ、召喚に使いたい」

『あー、そうだね、……、うん、確保できるように隠し場所でも作つておくよ。そういうえ  
ば、さつき反応が止まつてたけど、休んでた？戦闘があつたわけじやないよね？』

「うん、ちよつと仮眠とつてただけ。これから朝まで休憩しつつ移動して、オルレアンに近づこうと思う」

『了解、そしたらナビゲートをしよう。途中の街は通つていくんだよね？』

「ああ」

『そうしたら……、そうだね、少し右手の方に進路を修正してくれ、恐らくその先に街があるはずだ』

「りょーかい」

道中出てくる敵を倒しながら、ロマンのナビで方向を修正しつつ歩くと、確かに街が見えてきた。

悲しそうな顔でマリーが俯く。

「…………そう、この街なのね……」

「あー……、ここも滅びてるのか」

「…………ええ、生き残った人達は誘導して砦に連れていつたけれど…」

「…………そうか。…………つてことは、滅びて結構経つてことだね、どうしようか、迂回して他にいく?」

『いや、その街にはサーヴァント反応が二つある。夜間だし両方ともはぐれだとは思うけど……』

びくっと震えたサリエリが慌てて耳をそばだてるような仕草をして、しばらくしてほっと息をつく。

「たぶんあの女どもではないな」

「…………そんなにダメ?」

「音に対する冒涜だ、ぶち殺してやりたいが近寄りたくもない…………いやだ…………」

本当にどんなサーヴァントだったのか気になるところである。音楽家が嫌がる音痴つてなんなんだ。

とりあえずジョニーを中心陣を組み、ロマンの通信を最低限の音声に絞つてもらう。出来るだけ気配を殺しながら(殺せているのかもあまり自信はなかつたが)、ゆっくり街に入つていく。

『片方のサーヴァントが気がついた! そちらに真っ直ぐに向かっている! もう片方は君途中まで進んだところでロマンから通信が入つた。

たちとは反対側の端から動く様子はなさそうだ！』

『了解！防衛体勢！』

お互いの距離を縮めてそれぞれ武器を構える。

万が一、夜間になつてもオルレアンに戻つていないサー・ヴァントだつた場合、油断して話しかけたら攻撃された、なんてことになりかねない。

『方角3時！距離10000！9000……8000……うつわはつや、5000……350……』

「ロマン！視認できなぞ！」

『嘘だろ！？もう見えていいはずだ！100きつてる！』

「はあつ！？』

サリエリが叫んだ。

『ジョースター、そのドクターは本当に信用できるのか！？』

「ロマンを信用できなくて誰を信用するんだよ！？クソ、どこに、」

「…………ジョースター？」

ジョニーの背後からその声は聞こえてきて、咄嗟に身をよじつて振り返る前に腕ごと

その体を押さえ付けられた。

もやといふか、影のようなものから腕が二本伸びていて、徐々に集まりその形が人に近づいていく。やがて黒いコートに金髪の男がその場に姿を表した。

「ジョースター……ふむ……」

どうにか身をよじつて抜け出そうとするも全く身動きがとれない。現れたタスクが必死に押さえつける腕を引っ搔いていたが、霧のようなものが出てばかりで効果があるようには見えなかつた。

恐らくは、薄く霧状に拡散した状態で接近してきて、ジョニーの背後で形をなしたのだろう。

マスターを抑えられたサーヴァント達は手を出せないでいた。

「確か、この辺りに……」

唐突に持ち上がつた腕が、カルデアの制服の襟をインナーごと引きちぎる。抵抗していたジョニーは思わず固まつた。何を考えているのだ、こいつは。

ジョニーの肩にある星のアザが晒される。

「ああ、思つた通りだ。…………思つた、通り…………？」

疑問符を浮かべながらも爪がジョニーの肩口を切り裂いていつて、痛みにジョニーは身を震わせた。

傷を撫でた指がその男の口元に持つていかれ、血液をなめとられ…………、にい、と嗤つた。

「ああ、そうだ、よくわからんが……、ジョースターの血はよく馴染む。そう、そういうものなのだな？」

「はあ？ 知るかよキモッ!! はなせよ吸血鬼め!!!」

「余は吸血鬼ではない!!!!……いや、吸血鬼????? いや、そもそも、何故ジョースターという言葉にひつかかる？ 馴染む血？ 馬鹿な、そんなものはあるはずが……余は……余は……？」

唐突にジョニーを離したその男は、刹那、こちらがびっくりするほど勢いよく後ずさつた。慌ててマシユがジョニーを確保する。

「なんだ？ これは？ また余は何かに侵されたのか？ 余は吸血鬼だ、だが吸血鬼ではない、ジョースターなど知らぬ、だが、知つている……？ 余は、ヴラド三世だ、そうだ、それで、吸血鬼で……いや、違う、なんだ、なんだ、なんだ、なんだこれは!!!」

男はひどく錯乱して頭をかきむしっている。その隙に、ジョニイ達はじりじりと距離をとつた。

『…………ヴラド三世って言つたよね？』

「言つたね。吸血鬼伝説のモデルにされたルーマニアの領主だつたつけか」

「そうだね。宝具かスキルかなんかで吸血鬼になれるんだろう。  
使われた、ということだろうな……、僕の刃が通るかどうか」

「吸血鬼は弱点も多いですけれど、捕まえる前にあの霧のようなものになられたら、どうしようもありません……！」

「朝日がのぼるまで逃げ切ればいいのかしら……」

「サー・ヴァントだからそれで消失するとは限らんだろうな……、さて、」

狂ったように頭を振り乱していたヴラド三世ががばりとジョニーを見据えた。

ジョースターは我が怨敵だ、マスターも同じく我が怨敵だ、ジョースターは関係なくて  
も、要は貴様を殺せばこのよくわからない衝動はおさまるだろう！ 血を寄越せ！！

「嫌に決まつてんだろ！！て いうかなんだよサンソーンといいあんたといい！オルoleanは  
変なのばっかりか!!」

「僕は変じやない!!!」

「ごめんね!!!

絶対狂つてる。夜間にこんなところにいるのは謎だが、絶対これははぐれではなく敵側のサーヴァントだ。

にしても、召喚者は頭がおかしいのだろうか。狂化を付与する必要があつたか？それ

もこんな、何かを拗らせるような狂化ばかりをかけるなんて！アーチャーだつて弓で攻撃してきたかと思えば大口あけて突進してきたのだから似たり寄つたりだし。ジャンヌ・ダルクがまさか頭のおかしい奴らを侍らせて遊ぶのが好きな変態なのだろうか。えぐい乙女ゲーでもやつてろつて感じである。

サンソンが前に出て、襲つてきたヴラド三世を切り裂くも、霧が飛び散るだけでなんの変化もなかつた。それどころか、飛び散つた霧がコウモリに変化して真つ直ぐにジョニイに突つ込んでくる。

サリエリが咄嗟に腕を振り上げ、演奏による物理的な音圧でヴラド三世を吹き飛ばしたもの、距離はとれたが効果があつたかというと全くそんな風には見えなかつた。

「ああああ、う、うううう、W W W W, W R……ちが、違う、違う違う！余は！この、」

「どうする!? 誰かニンニクもつてない!?」

「ニンニク入りの食事は持つてきてません！」

「なかつたつけ！」

「それは女吸血鬼の方だろうが！！……やつてはみる！」

叫んだサリエリが指揮をとるべく腕を振り上げた時だつた。

『戦闘中にすまない！もう一人サーヴァントが接近してきている！』

「なつ、もう一人つて街の反対側にいたやつ!?」

『早い早い、もう接敵する!!』

その頃にはジョニイ達の耳にも、高らかな嘶きと馬の足音が響きわたっていた。ヴラド三世とジョニイ達を分断するように、白馬に乗った騎士が飛び込んでくる。白地に赤の十字が染め抜かれたセントジョージ・クロスのサーベルを翻らせ、そのサーベルは高らかに宣言した。

「戦いは苦手ですが、旅人を襲う魔がいるとなれば話は別です。サーヴァント・ライダース。あなた方に協力いたしましょう!」

# 聖人問答

セイントジヨージ・クロス。

つまりは、聖ジョージの十字架。

突然割り込んできたその英靈の姿は、よく絵画や像で表される姿そのもので。怯えた様子のヴラド三世が、絞り出すように言葉を吐き出した。

「サー・ゲオルギウスか？」

「いかにも。さて、小竜公、あなたは私に挑む覚悟がおありか？」

ヴラド三世は盛大に舌打ちをする。

小竜公というあだ名をもつヴラド三世ヴァンパイアへの、竜退治の逸話をもつ聖人からの痛烈な皮肉だつた。顔面をひきつらせたヴラド三世が、思いつきりジョニイを睨み付け、そのままつと闇夜に溶けた。

いくらか間をおいて、吸血鬼が完全に去つたことを確認したジョニイはその騎士を見上げた。

「……サー・ゲオルギウス？ 聖ジョージ？ マジで？」

「せつかくライダーと名乗つたのに、我が姿はどうも、あー、後世でよく表現されている  
ようですね。初見で見破られるとは思いませんでした」

「いや…、その十字架も、白馬も、見る人が見れば一発でわかると思うよ? イギリスじや  
国旗に採用されてるんだし……。…………ありがとう、助かつた」

「どういたしまして」

がしゃん、と鈍い音をたてて、ゲオルギウスは馬から降りた。  
だが、近寄つてはこない。

「…………さて、そちらのアサシンは見覚えがありますが…、あなた方はどちらですか?  
「まあ、そこからだよなあ……」

とりあえず今までの経緯を説明する。サンソンも敵側のサーヴァントではないことを  
説明すると、やつと納得したように近寄つてくれた。

「なるほど、カルデアの……。既に随分と戦いを経験している様子で」  
「…………足のこと言つてるなら、後悔してない自業自得つてやつなんでほつといってくれ  
よ」

「それは失礼致しました」

なんとなく会話が途切れ、じつとゲオルギウスを眺める。

「ところで、あー、ゲオルギウス?」

「その呼び方で結構ですよ、なんでしょう？」

「そつちの確認は完了したみたいだけど、こつちの確認もしていいか？あなたはどつち？」

キヨトンとした顔のゲオルギウスと、えつ、という顔で振り返ったマシユとマリーが印象的だつた。

よくよくみればジョニイは未だに腕にタスクを乗せている。

「…………なるほど、確かに戦いを経験しているようで」

「僕は世界を救う。もう一回聞く、あんたはどつちだ？」

困つたように微笑みながら、ゲオルギウスはゆっくり両手をあげてホールドアップの姿勢をとつた。

「無論、世界を救う側ですとも。聖ジャンヌ・ダルク人がフランスを滅ぼそうとしているからといって、私も疑われるのは心外ですよ」

じつとゲオルギウスの目を覗きこんだ後、ジョニイはため息をついてタスクを腕の中に戻した。

「疑つて悪かつたよ」

「いいえ、状況が状況です。むしろその確認は今後も怠つてはなりません。……さて、お互いに味方であるとわかつたことです、情報交換をしませんか？」

頷いて、話をする。

先ほどはざつくりとした説明のみだったので、こと細かに、この特異点にいつきたか、とか、何と遭遇したか、とか、撃破したものは何か、だとかを語った。マリーとサリエリの情報も改めて確認しつつ、ジョニイは粗方話すべきことを話していく。

「……ってどこか。それで、ジャンヌ・ダルクが竜を従えてるってどこまでは把握してるかな」

「聞き及んでいましたか。……竜という以上の情報は？」

黙つて首をふると、ふむ、とゲオルギウスは頷いた。

「どうやら皆様より私の方が竜については詳しそうだ。……それに、思つたより長く一所に居すぎましたね、場所を変えて腰を据えて語るとしましよう。同行しても？」

「ありがたい、頼むよ」

腰を少し曲げて伸ばされた手に応え、ジョニイはゲオルギウスと握手をした。

街を離れて近場の森に避難する。夜間とはいえ、上空を飛ぶワイバーンが多い以上、遮蔽物があつた方が安心できる。

「では、竜についてお話ししましょう。この特異点に召喚されしは、かの邪竜、ファヴニールです」「ファヴニール……？」

「マスターはご存じないですか？」

「うん、ちょっとわかんない」

複雑な家庭環境とはいって、一応一般的な家に育つたジョニイである。魔術的な意味ではもちろんのこと、家族の世話をするので精一杯で、ファンタジーには詳しくなかった。せいぜいが地上波初登場！とかのテレビで見る映画だつたり、友人のやつているゲームを横で見ていたりしたときにみたような知識でしかない。

では説明しましよう、とマシユが口を開いた。

「大昔、この世界には竜種が存在していた、というところから始めた方がマスターにはわかりやすいでしようか？」

「あー、うん、ここだとちつこい竜みたいなワイバーンとかも飛んでるけど……、つまり、特異点だから飛んでるわけじゃなくて、大昔には存在していて、絶滅したやつが何故か特異点に出現しているとかそういうこと？」

「絶滅した、というのは少し違いますが、概ねは正しいです。ちなみに、ゾンビやスケルトンなんかも特異点だから出現している訳ではなく、平時の世界であつても、条件があれば発生しますし、魔術師によつて発生なんてこともありますよ」

「…………知らないだけで結構世界つてファンタジーだつた？」

その言葉には苦笑されてしまった。

「こほん、と咳払いをして、マシユが話を続ける。

「その、いわゆる伝説上の動物達は幻想種と分類されていますが、その中でも大きな力を持つのが竜種です。その中でもファヴニールは有名な部類で、強大な竜だつたそうです」

「…………すごい生き物の中でもさらに強くてすごいやつだつたつてこと？」

「その通りです。神話、寓話などでの具体的な登場を言いますと、ニーベルングンの歌、ヴォルスンガ・サガなどで登場しますね。この二つ、原典は同じだそうですが……」

「削つたり出来ないくらい見せ場での登場をする訳ね」

「とてつもなく力の強い竜だということはわかつた。」

「でも、ようは物語だろ？竜つてことは倒される側だよな？」

「はい、シグルド、ないしはジークフリートによつての討伐が語られています」

「…………ええー、英靈化してそうなもんだなそれ……見かけてない？」

「はぐれ組に話をふると、マリーとサリエリは首をふり、ゲオルギウスは頷いた。

「…………頷いた？」

「ゲオルギウス、会つてゐるのか!?」

「ええ、会つてはいるのですが…………」

「その言葉のつまらせ方に非常に嫌な予感がした。」

「既に死亡しています。呪い等を受けて疲弊していたところを敵方の聖女マルタによつて匿われていたのですが、私が駆け付けた時には瀕死で……」

「マルタ？味方になつてくれそうな目はあるのか？それに、瀕死だつたつて、」

「マルタは正気ではありません、敵方のサーヴァントなのは間違いない。ただ、それでも食い縛つた彼女の起こした奇跡が、ジークフリートを匿うことだつたのでしよう。：私がジークフリートの元にたどり着いた時点で、呪いは既に靈核に達していました。もう少し早ければ、あるいは聖人がもう一人いれば助けられたのかもしれませんがない…………」

「なるほど……あー、うん、しようがないものはしようがない……。他に出会つたサー・ヴァントはいる？敵も含めて」

「敵方のサンソン、マルタ、ジャンヌ・ダルク、ジル・ド・レエ、カーミラ伯爵夫人は確認していますよ。味方側としては清姫、エリザベート・バートリー、それからこの時代で存命、サーヴァント化はしていないジル・ド・レエがいます。彼ら三人に、今避難民が集まつている砦の守護をお願いしてきました」

「カーミラ……吸血鬼まだいるのかあ……」

「遭遇しないまま特異点を解決した方がマスターの精神衛生上よさそうです……」「砦で皆守つもらつていてるのね、よかつた……！」

「私は!!!絶対に砦に近づかない!!!」

ほつとしているマリーの台詞をかき消すサリエリの宣言でああ、とジョニイはさらに遠い目をした。そのエリザベートと清姫とやらがサリエリのいう壊滅的音痴のキヤツトファイターズなのだろう。

つまり、状況を整理すると、である。

ファヴニールのカウンターとして呼ばれていたのかもしれないジークフリートはすでに死亡していて、聖人殺しのサーヴアントはいるかはわからない。超拡大解釈をするのならお坊さんを殺した清姫がひつかかるかもしれないが、バーサーカーということと、愛した故に追いかけて殺した気質がジャンヌ・ダルクに適応されるかというと微妙なところだつた。会つたことのあるマリー、サリエリ、ゲオルギウスがあれば御せなし方向性が違う、と静かに首を振つていたので今まで通り砦にいてもらつた方がよさそうである。

「そもそも、お二人とも喧嘩のしそうで靈基が損傷していたのもあつて、出歩くよりは、と砦での防衛をお願いしていまして……」

そつと目をそらしたゲオルギウスの追加情報で清姫（負傷）とエリザベート（負傷）に救援を求めるのは完全になしになつた。なんてこつた。で、敵はわんさかいる。ジャンヌ・ダルクを筆頭に、ジル・ド・レエ、シュヴァリエ・

デオン、聖女マルタにヴラド三世にカーミラ、サンソンに仮面の男に全身鎧の男。なんと9名は最低になることになる。ついでにファヴニールも。

味方はサーヴァントのみで人数を計算するなら7名。実際に動いているのは5名。カルデアにいるサーヴァントも全員呼べば一応人数だけは拮抗するものの、ファヴニールもいる相手方には不安要素でしかない。

「…………ワイバーンの目から逃げつつファヴニールかいくぐつて、こつそり敵の拠点に忍び込んで、サンソンの宝具でさっくり倒すのがいいかなあ…………。幸いジャンヌ・ダルクは処刑されてるからサンソンの宝具は特効対象だし」

『そうだね、うーん……、今わかつてゐる面子だと拠点防衛で有名なのはヴラド三世くらいだし、そことファヴァニールさえ乗り越えればなんとかなるんじや……？いや、その二つが何よりも問題だらうけど…………』

全部スルーしてたどり着きたいなあ

わりと詰んでいた。マリーとサリエリ、ゲオルギウスには足があるが、カルデア組には速度がなく、全体的に隠密にも向いていない。何より仮定ラスボスには刃が通るであろうが、手前の中ボスファヴィニールと取り巻きが倒しづらいのではそもそもたどり着けない。

鎧の男に壊されてしまつたし」

避難民の運搬に使つていたらしいのだが、その全身鎧の男とやらに遭遇したときに壊されたそうだ。

ううん、と首を捻つたところで、何か言いたげにサンソンがゲオルギウスを見やつていることに気づいた。

「サンソン?」

「ああ、いや、「

その、とサンソンは何か言いたそうな顔でまたゲオルギウスを見る。

「……その、ゲオルギウス様、貴方は竜退治の聖人では?」

「……えつ?」

「そうですよ」

あつさりと頷いたゲオルギウスの横で、むしろ聖ジョージを知つていて、何故その逸話を知らないのだという顔でサンソンに見られた。あつ、という顔でマシューとマリーとサリエリが固まっていたのはスルーかお前。

聖ジョージのドラゴン退治。

彼が異教の国に立ち寄つた際、ドラゴンに苦しめられていた王が助けを乞うたことがある。引き受けた聖ジョージは、何故かドラゴンの首に繩をつけて国まで引きずつてき

て、これがドラゴンです、あなた方が改宗するならば、このまま倒してしんぜましよう、と言つた。もちろん改宗するので倒してくれ、というと、聖ジョージはドラゴンを殺し、国の人々は皆キリスト教徒になつたとさ、というような伝説である。むろん、諸説はある。

「…………えーっと、ファヴニール、倒せる？」

言い出すタイミングが掴めていなかつたので申し訳ないのですが、と前置きした上で、ゲオルギウスは微笑んだ。

「元よりそのつもりで私は砦から出てきたのですよ。それがジークフリート殿との約束でもありましたから」